

1. 式典



式典会場

50周年記念行事の中心行事である記念式典は、4月6日、13時15分から東京大学安田講堂において盛大に挙行されることとなった。この日、風はやや強くはあつたが構内の桜は折からの晴天に恵まれ五分咲に咲揃い、記念式典を盛り立てるにふさわしい構内風景であつた。

式場は、講堂演壇正面に日本国旗と日本鉄鋼協会旗を掲げ、演壇周辺はこれを黄菊白菊および赤と白のカーネーションで飾り、簡素ながら荘重感溢れるものであつた。

式典は、奏楽に伴なう内外来賓、協会役員、特別表彰者、一般会員の式場への入場開始によりその幕を開いた。この日、式典の序たる奏楽にフィルハーモニア弦楽四重奏団はピアノ、コントラバスを加え、シューベルトの有名な弦楽五重奏曲「鱒」を12時50分より演奏した。その軽快な曲の流れに乗り、華やかな花章を胸につけた外国来賓はそれぞれ婦人を伴ない、コムパニオンに導かれながら入場し、演壇に向つて左側の特別席に着いた。コムパニオンは特別席の周囲に着席し、国内来賓、表彰者、協会役員は右側の席を占めた。一般会員はさらにその外周を囲んで着席し、式典参列者は総計600余人に達

した。奏楽が終楽章の半ばを過ぎるころ、壇上向つて右の貴賓席に、佐藤首相、愛知文相ら国内貴賓5氏、左には英国鉄鋼協会元会長アンドルー・マッカンス卿ら外国貴賓13氏がつかれ、湯川会長は正面に、作井副会長は司会者席に立たれ、ここに開式準備はすべて整うにいたつた。

壇上を見上げるに、列席の外国貴賓はヨーロッパ、アメリカ、インド、さらにラテンアメリカの、金属あるいは鉄鋼関係の学協会、連盟の会長を網羅し、冶金技術者にはその高名を轟かせているチップマン、シェンクの両教授も見え、全くの豪華キャストであつた。

13時15分奏楽が終了するや、直ちに一同起立し、日本国歌演奏が始まり、荘重厳肅な弦の調べは巨大なドームに吸い込まれてゆき、参列者の胸に深い余韻を残した。ここに開式宣言が作井副会長より発せられた。

次いで湯川会長は正面に進み、日本鉄鋼協会の50周年記念式典に海外から遠路はるばる参集された外国来賓に深甚の謝意を表わし、国内諸賓にはご多忙を割いて出席されたことに対する感謝を述べた。また本協会設立にあたりご尽力下さつた先輩諸賢の功績を賛えとともに、

50年の歴史を汚すことなく、ますます協会援助の充実強化を誓う式辞を10分間にわたり述べられた。外国来賓は同時通訳される式辞を各席に備えられたイヤホンにて聴き、あらためて、世界一流の鉄鋼先進国となつた日本の鉄鋼技術の驚異的發展におけるわが協会の果した偉大な業績を知つたことであろう。鉄鋼業界の長老と目される人々は黙想に耽るがごとく式辞に聴き入り、わが協会が世界第1級の学会と認められるにいたつた現在をかえりみて、今まで多大の努力を払つて前進し来たつたことに、感無量の心境と推測された。

つづいて来賓祝辞に入る。まず佐藤首相は正面に進み国家経済の観点から鉄鋼業の占める位置を考える時、その大発展のかげに技術面からバックアップを続けた協会の業績を賛え、今後のより一層の発展を祈念するとの祝辞を述べられた。万雷の拍手がこれに応じた。

次いで、科学技術庁愛知長官(文相)の祝辞となる。

日本鉄鋼協会が今までの幾多の困難な道を超え、世界に比肩しうる立派な学会に成長したことに祝意を表わされ、今後ますます鉄鋼の科学技術進歩のために活躍することを希望すると述べられた。

首相、文相は祝辞を述べ終ると、全員の歓送の拍手を背に退出された。

日本学術会議、朝永会長は、鉄鋼協会の共同研究活動海外各学協会との交流などの有益な活動を賛えるとともに、さらにこの分野の研究活動を進展されるようにとの祝辞を述べられた。

鉄鋼協会と関連を有する学協会は多数あるが、その中から特に緊密な関係を持つ金属学会、機械学会、電気学会、土木学会、建築学会、造船協会、溶接学会および化学学会を代表して、日本金属学会赤坂会長は、今日の大発展は鉄鋼関係者の絶えざる創意と工夫の賜物であり、今後もその努力を怠ることなく、また関連学協会としてもわが国の産業・経済の発展のため相携えて前進を続けたいとの祝辞を述べられた。

国内貴賓の祝辞の最後として、日本鉄鋼連盟永野会長は、日本の産業・技術の戦後の刮目すべき発展を遂げた姿を外国来賓に見ていただくことはわれわれの誇りとともに光栄であること、さらにこの大発展は諸外国の優秀な設備、技術、エネルギー源に負うところ大きいことを忘れることはできない、また、われわれには一人当りの鋼材消費量から判断してなお一層鉄鋼業を発展させ得る余地があり、したがって、鉄鋼協会は今後ますます日本の鉄鋼技術水準の高揚に邁進されたいとの祝辞が述べられた。

以上で、国内来賓の祝辞が終了し、次に外国貴賓の祝

辞となる。まずオーストラリア鉄鋼業を代表してオーストラリア金属学会会長ロバート・ギフキンス博士が、盛んな拍手に迎えられてマイクの前に立ち、自国の歴史にかんがみれば、50年という歴史がいかに有用貴重なものであるかを説き、日本鉄鋼協会が向う50年間にさらに大きな成功を招くよう祈るとの祝辞を述べた。短い時間のスピーチながらも、あらためてわれわれに50年という時間の意義を悟らしめるものであつた。

オーストラリア鉄鋼協会会長J. オベレッガー博士は来日直前、病にたおれたため来日は不能となつたので、祝辞はオーストラリア大使館書記官クラウス・ツィーグラー博士が代読され記念品として陶製の騎士がまたがった駿馬の置物を贈られた。

ベルギー鉄鋼業界を代表してベルギー鉄鋼連盟会長ピエール・ファンデレスト博士は、粗鋼年産 3,900万トンを超え、世界第3位の日本鉄鋼業の発展と、その発展に大きな功績のあつた鉄鋼協会を賞讃し、ベルギー業界の心からの祝意をお伝えするとの祝辞を贈られた。あわせて、立派なメダルが贈られた。

フランスからは、欧州鉄鋼情報センター会長アンリ・マルコー氏が、日本の鉄鋼生産の大発展は、鉄鋼協会全員の勇気と忍耐の賜物であるとの祝辞を述べられた。

わが国の鉄鋼業が範としたドイツ鉄鋼業を代表して、ドイツ鉄鋼協会会長ヘルマン・シェンク博士は、両鉄鋼協会員はそれぞれ、国民の福祉増進に多大の責任を有していることを指摘し、日本人の勤勉性がその責任をいかに巧みに果しているかを賛えた。また、会誌「鉄と鋼」を通じ、日本の数多くの立派な研究成果に接しており、それらを非常に高く評価している。今後も両協会は緊密な協力活動を続けてゆきたいとの祝辞を述べ、記念品として重厚な装幀の「鉄の歴史」(ドイツ鉄鋼協会編)を贈られた。

一昨年、わが協会と Kindred Society となつたイギリス鉄鋼協会および業界を代表して、元協会長、コルヴィル製鉄名誉会長アンドリュウ・マッカンス卿は、今後も両協会が親密な関係を保ち、さらに深い協力を続けたいと切望し、イギリス鉄鋼協会会長フランク・ヘンリー・サニター会長署名の、日本鉄鋼協会50周年の祝辞状(Scroll)を読みあげ、湯川会長に手渡された。

インドからは、国立冶金研究所長バル・ラジュ・ニージャワン博士が業界を代表して立ち、日本鉄鋼業に最新の技術革新を普及せしめるにあずかつた日本鉄鋼協会の功績をたたえる祝辞を述べられた。

イタリーの業界を代表して FINSIDER 鉄鋼研究所長アントニオ・スコルテッチ教授は、日本鉄鋼業の成功の

鍵が日本人の豊かに恵まれた本質的創造性を科学・工業・経済目的に功みに生かしたところにあると指摘し、かつ戦後の大変動期にいかにもすぐれた指導者を生長せしめたかを強調した。

ラテンアメリカの代表としてラテンアメリカ鉄鋼協会長カルロス・プリー博士が立ち、日本の特に鉄鋼業はラテンアメリカの産業人の関心の的であり、重要な教訓を垂れてくれるものであり、本日ここに招待され、名誉会員という光栄ある称号をうけますことは、ラテンアメリカの鉄鋼関係者が発展のために払っている努力に対し与えられたものであり心から感謝するとの祝辞が述べられた。

オランダ代表は、ローヤルオランダ製鉄専務取締役アレキサンダー・ドライヴァー氏で、その祝辞は日本の近代化の端緒はオランダがつけたことを想う時、世界の工業界の地位に非常に大きな懸隔を生じている両国の現在にはまさに感慨無量であり、それだけに日本の鉄鋼業界の着実にして高速度の生長に惜しみない讃辞を贈るというものであつた。そして記念としてクリスタルガラスの立派な花びんが贈呈された。

伝統的に高級鋼製造に卓越せるスウェーデンを代表してスウェーデン鉄鋼連盟会長ハカン・アベニウス氏は現場応用面でのわが協会の研究活動およびその顕著な業績と、近時重要な基礎的研究にも努力を払っていることに賛辞をおくり、今後の厳しい国際競争にはつねにフェアプレイの精神を忘れることなく、相携えて進んでゆこうと結んだ。そして重厚な深い味わいあるガラス鉢を記念として湯川会長に手渡された。

アメリカからは、マサチューセッツ工科大学ジョン・チップマン教授が、学会代表として立たれ、日本の高炉LD転炉の驚くべき高生産性を賞讃する祝辞を贈られた。わが国の鉄鋼研究者の間にその卓見と高い指導力を謳われるチップマン教授には絶大な歓呼の拍手が送られた。

最後にヨーロッパ石炭鉄鋼共同体 (ECSC) の総局長フランコ・ペコ氏が、欧州と日本の鉄鋼業の関係を説き今後も高い友好関係を持ちつづけようとの祝辞を述べられた。(ここで10分間の休憩に入る。)

式典は次いで特別功労者表彰に入つた。50周年を記念して今回特に制定された俵賞(タワラ・ゴールドメダル)は東京大学名誉教授でかつ日本鉄鋼協会長を2期勤められ、学界業界いずれにおいても業績赫々たる三島徳七氏に贈呈された。湯川会長より三島名誉教授にメダルと賞状が手渡される時に湧き起こつたあらしのような拍手は、わが国の鉄鋼に関する学術技術の大長老を讃える響

に満ち満ちていた。

次いで製鉄功労賞の授与となる。本賞はわが国鉄鋼業の進歩発達、学術技術の研究開発に特別の功労のあつたものに授与されるもので、住友金属工業・小田助男専務取締役は「高級鋼管製造技術の開発」により、大阪製鋼・高石義雄会長は「独創的設計による銑鋼一貫工場の建設と操業」により、神戸製鋼・外島健吉社長は「特殊線材および溶接棒製造技術の開発」に、日本鋼管・富山英太郎専務取締役は「純酸素転炉の導入開発」により、金属材料技術研究所・橋本宇一所長は「科学技術振興、金属材料技術研究所の設立、整備」により、富士製鉄・平世将一副社長は「わが国におけるストップミルの創設、同技術の導入開発」により、東北大学・的場幸雄教授は「鉄鋼技術に関する人材の育成」により、日本製鋼所・柳武社長は「大型鑄鍛鋼および高級厚板製造技術の開発」によりそれぞれ湯川会長から賞状とメダルを授与された。最後に八幡製鉄・湯川正夫副社長は「戦後の鉄鋼業の復旧、合理化の推進、ウジミナス製鉄所の建設」の功績により、会長代理の五弓勇雄理事より賞状とメダルを授与された。

協会事業功労賞は本会事業推進のため特別の功労のあつた者に授与される。今回は、トピー工業・伊木常世専務取締役、三菱製鋼・大島製作所内山道良副所長、日本鋼管・桂寛一郎取締役、東京工業大学・作井誠太教授八幡製鉄・武田喜三常務取締役、早稲田大学・長谷川正義教授、東京大学・松下幸雄教授、富士製鉄・村田巖取締役、日本鉄鋼協会・橋本芳雄参与の計9氏に賞状とメダルが授与された。

三賞授与ののち、受賞者答辞が行なわれた。まず俵賞に輝く三島徳七博士は、初の俵賞を授けられたことはまことに身にあまる光栄であり、終生忘れ得ぬ名誉であるとの謝辞を述べられた。製鉄功労賞受賞者を代表して、平世将一氏は、今回の受賞の榮譽に違背せぬよう、今後一層の努力と貢献を致したいとの謝辞を述べられた。協会事業功労賞受賞者を代表して伊木常世氏は、会員としての勤めを果たしたに過ぎないのに過分の表彰をいただいたのは過分の名誉であり、今後ますます協会事業発展に力を惜しまぬ所存であるとの謝辞を述べられた。

以上で特別表彰式を終了した。15時25分であつた。ここで10分間の休憩となり、壇上の整理などが行なわれた。

15時40分より名誉会員推挙式に入る。今回の記念式典には海外12カ国の鉄鋼関係の最高権威者35氏を招待したがそのうちの19氏を名誉会員に迎えることとなつた。

壇上の左右両側の席に夫人同伴で被推挙者は着席し、

総勢33人。誠に壯観であつた。

推挙は国名アルファベット順に行なわれた。まずオーストラリア鉄鋼協会会長ロバート・ギフキンス博士が湯川会長の前に進み出で、会長は推挙状を読み上げ、純金の名誉会員バッヂを手渡された。オーストラリア鉄鋼協会会長オーベレッガー博士に代つて、大使館書記官クラウス・ツィーグラー博士が推挙状とバッヂを受取られた。CN



マッカンス卿への花束贈呈

RM研究所長ピエール・コヒール博士は夫人同伴で中央に進み出られた。博士は会長より推挙状とバッヂを夫人には大きな花束が贈られた。この推挙式のために3人の協会役員有志の令嬢が華麗な振袖姿で壇上に控えており夫人の方々に花束を贈る役目を果された。

以下、同様にして推挙は遅滞なく進行した。以下その順序を挙げる。4番目はベルギー鉄鋼連盟会長ピエール・ファンデレスト博士ご夫妻、次いで、フランス金属学

会長パウル・ラコム教授、IRSID専務理事マーク・アラール氏はご欠席のため、マルコー氏が推挙状とバッヂを代理受領、欧州鉄鋼情報センター会長アンリ・マルコー氏、フランス鉄鋼連盟会長ジャック・フェリー氏ご夫妻、マックスプランク鉄鋼研究所長ウィリー・オェルセン博士、ドイツ生産性本部長エルンスト・ウルフ・モンゼン氏(フェニックスラインロール社専務取締役)、元イギリス鉄鋼協会会長アンドルー・マッカンス卿ご夫妻、インド国立金属研究所長バル・ラジュ・ニージャワン博士 FINSIDER 鉄鋼研究所長アントニオ・スコルテッシ博士ご夫妻、ラテンアメリカ鉄鋼協会会長カルロス・プリート博士ご夫妻、国営オランダ製鉄所専務取締役アレクサンダー・ドライヴァーご夫妻、スウェーデン鉄鋼連盟会長ハカン・ヴィルヘルム・アベニウスご夫妻、USスチール社副社長ジエームス・オースチン博士ご夫妻、アメリカ金属学会会長ジョン・フエロウズ博士ご夫妻、AIME次期会長ウィリアム・スティーヴンス氏ご夫妻。

以上で名誉会員推挙は無事終了し、最後に、すでに日本鉄鋼協会名誉会員の M.I.T. のジョン・チップマン教授ご夫妻、ドイツ鉄鋼協会長のヘルマン・シエンク教授ご夫妻に花束が贈られ、万雷の拍手のうちに名誉会員推挙式は16時20分に終了し、これにより本日の記念式典は幕を閉じた。

式典終了は予定時刻17時よりも40分早く終了した。

式典終了後、来賓の方々はそれぞれ控え室に戻り、茶菓による休息をとつた後、用意の車にて17時ごろまでにそれぞれホテルあるいはカクテルパーティ会場のホテル・ニューオータニに移動して行つた。

1.1 式 辞



本日ここに日本鉄鋼協会創立50周年記念式を發行するに当り、来賓各位におかれましては、ご繁忙中に拘らずご臨席の栄を賜りましたことは本会にとり最も光栄とするところであります。また会員各位におかれましては各地からご参加下さいましたことを厚く感謝いたします。

ことに最も銘記すべきことは、このたびの祝典に際し遙々海外諸国から最も有力な学協会を代表する方々を多数お迎えできましたことと内は国を代表する佐藤総理大臣を始め各界を代表する多数の来賓の臨席の栄を得たことでありまして、まことに感激のいたりであります。

顧えりみますと、本会は大正3年6月、野呂景義、香村小録、今泉嘉一郎、俄国一の先覚者の方々の発意によつて創立準備が始められ、翌4年2月6日700名の会員をもつて設立されたものでありまして、当時わが国におきましては、国営八幡製鉄所が唯一の近代的一貫製鉄所として発足して間もない時でありました。

爾来星霜移ること50年、わが国鉄鋼業の発展とともに本会も次第に成長を遂げ、今や会員総数も9000余名の多数に達しまして、国内においてはもとより海外諸国よりも、鉄鋼の學術技術に関しましては最も権威ある団体として認められるにいたりました。特に鉄鋼業に必要な諸資源に乏しいわが国があらゆる困難を突破し、世界的鉄鋼業を建設しつつあるその背景とこれを支える技術とは海外の諸国よりも深く注目されるようになってまいりました。

本会創立当時におきましては、毎年数回の講演会を開催し、また毎月1回会誌を刊行する程度でありましたが現在では毎年全国にわたり数十回の講演会・講習会・座談会などの集会を開催し、また会誌のほか多数の有益な刊行物を發行するまでの盛況を見るにいたりました。

そのほか本会の事業としては、共同研究会および多数の専門委員会を設けて、鉄鋼に関する各分野にわたりそれぞれの問題を取り上げて研究を進め、その解決に当っておりますが、これらは鉄鋼技術の進歩発達に貢献するところ少なからぬものがあると思じます。

このように本会がその機構を拡大するとともに内容を充実して業績を挙げておりますことは、歴代の会長始め役員ならびに会員のご努力によることはもちろんであります。一面において鉄鋼業界各位の絶大なご支援に負うところ極めて大なるものがあるのであります。この機会において本会を代表して深く感謝の意を表します。

現下の世界状況を察しますると、科学技術の急速なる発展と工業の健全な振興とを望むことは各国共通の事実であると認められます。今後におきましては、この共通の基盤に立つて、海外諸国の学協会との提携を一層緊密にし、国際間の交流をますます盛んに行ない、相協力して鉄鋼技術の研究開発を推進しひいて国際親善の強化と世界文化の向上に寄与するようにいたしたいものと心から念願する次第でありまして、これを思うとき本会の責務のはなはだ重大なことを痛感いたします。

ここに私は本会のこの輝かしい発展を顧みて、将来ますますその事業を堅実に拡充し、その使命達成に精進して、さらに優秀な業績を挙げるべく努力を傾注する覚悟であります。

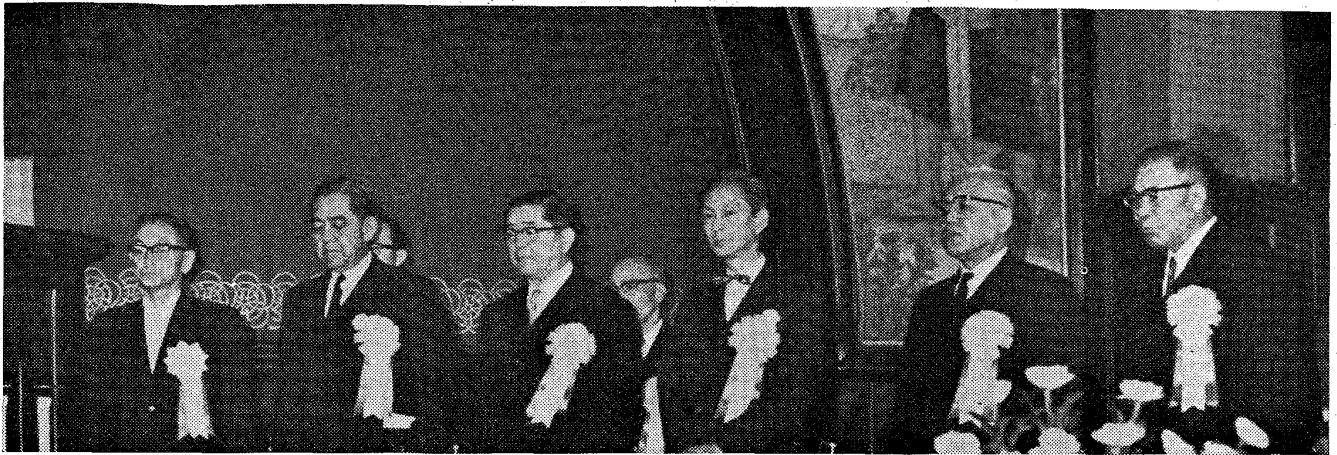
しかしながらこの目的を達成するためには、ご臨席各位のご支援、会員各位のご協力に待たなければよくし得ないところでありまして、各位におかれましては、何卒一層のご理解とご厚情とをもつて本会のためご支援ご鞭達賜りますようお願い申し上げます。

これをもつて式辞といたします。

昭和40年4月6日

社団法人日本鉄鋼協会

会長 湯川正夫



1.2 祝 辞

内閣総理大臣

佐藤 栄 作 殿



本日、社団法人日本鉄鋼協会創立50周年記念祝典を挙
行せられるにあたり、一言お祝の言葉を申し述べる機会
を得ましたことは、私の光栄とするところであります。

日本鉄鋼協会は、大正4年に創立せられてから、ここ
に50周年を迎え、めでたく記念祝典を挙げ、数々の記
念行事を催されるにいたりましたことを衷心からお慶び
申し上げます。

日本鉄鋼協会がその創立以来幾多の困難を克服して鉄
鋼に関する学術、技術の研究に精進され、わが国鉄鋼業
の発展に寄与せられました輝かしい業績に対しましてこ
こに深く敬意を表するとともに、会員各位の多年にわた
るご努力に対し感謝の念を禁じ得ないのであります。

思うに、わが国の鉄鋼業は戦後急速の回復を示したば
かりでなく、まことに目覚ましい躍進を遂げ、その生産
は量質ともに逐年上昇するとともに、鉄鋼製品の輸出額
は大幅に増大して、わが国の輸出商品中最大のものとな

つております。今後さらにわが国の輸出の増進をはかる
ためにも、鉄鋼業自体の合理化を推進しその技術水準の
向上と基盤の強化を行ない、あわせて国際競争力の培養
をはかることが現下の急務であると信ずるのであります。

かかる見地からも日本鉄鋼協会がいよいよ健在で、鉄
鋼に関する学術技術の進歩と鉄鋼業の発展のため終始尽
力を致されておりますことは、邦家のためにご同慶に堪
えない次第であります。

今や学界、業界の各分野にわたって、目覚ましい技術
革新が行なわれつつあるときこの協会に対する期待がい
よいよ大なるものがあります。

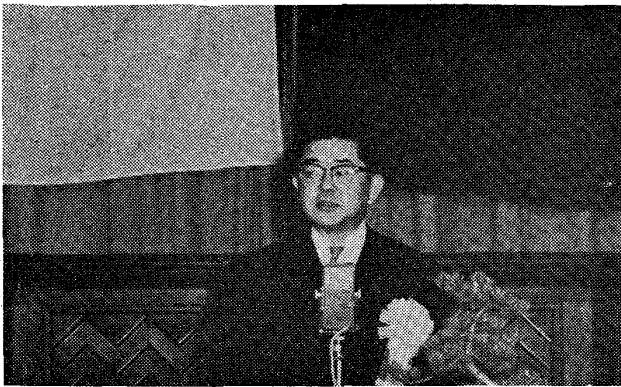
私は、今後においても日本鉄鋼協会が常にわが国鉄鋼
業のよき指導者的役割をはたすとともに、ひろくわが国
産業の発展のために一層大なる貢献をなされますこと
をお祈り致しましてお祝いの言葉と致します。

科学技術庁長官 (文部大臣)

愛 知 揆 一 殿

今日のお目出度い式典に際しまして多数の外国のお客
様方をお迎えしたこの席で、私からも一言お祝の言葉を
申し述べる機会を得ましたことを大変光栄に存ずる次第
でございます。

ただいま総理大臣よりお話がございましたように、こ
の協会が大正4年に創立されましてから今日までの間を
顧みますと、この50年の長い間にわたってわが国の
鉄鋼に関する科学・技術の進歩、発達—この業績は本当
に偉大なものがあつたと存じます。そしてこの協会の皆
様方が、学会と産業界との提携のうえにたたれまして、
幾多の有益な事業を遂行されましたことは、本当に偉大



なるものであると存じます。わが国の鉄鋼業は、戦後急速に復興いたしまして目覚ましい躍進をとげ、今やその生産額におきましても、また技術の水準の点からいたしましても、世界で有数のものとして成長するにいたりますが、これは鉄鋼界が資源の不足、その他あらゆる困難を克服して、技術水準の向上と優秀な技術者の育成に努められたことがきわめて大きいものがあると信ずる次第であります。

この間に処して、本協会ならびに関係の皆様方におかれましては、鋭意努力を継続され、わが国の鉄鋼業の発展のために寄与されましたことに対しまして改めて深く敬意を表する次第であります。

本日のこの輝かしい日を契機にしまして、関係の皆様方に更に一層の努力を重ねていただき、わが国の鉄鋼業の発展と科学・技術の進歩のためにますますご活躍下さいますよう心からお祈りいたしまして、簡単ではございますが、お祝の言葉とさせていただきます。

日本学術会議会長
朝 永 振一郎 殿



本日、日本鉄鋼協会設立 50 周年記念式典が挙行されるにあたり祝辞を述べる機会を得ましたことは私の大きな喜びとするところであります。

日本鉄鋼協会は鉄および鋼に関する学術・技術を調査研究しわが国における鉄鋼業の振興発達を期することを目的として大正 4 年に設立されました。

以来、この目的を達成するために学界、業界との緊密な協力のもとに鉄鋼生産技術の共同研究、設備技術の共同研究、海外諸国の鉄鋼協会との学術交流、鉄鋼に関する学術、技術の功勞者に対する表彰その他有意義な活動を行なつてまいりました。その功績は多大なものがあります。

今後、これらの諸活動をさらに推進されることによつてわが国鉄鋼の学術・技術の向上が一層促進され、ひいては国民生活に大きな貢献をもたらすものと信じます。

本日、ここに設立 50 周年記念の輝かしい日を迎えられました日本鉄鋼協会が、関係各位のご尽力によつてますますご発展されることを念願して私の祝辞といたします。

関連学協会代表
日本金属学会会長
赤 坂 武 殿



本日、日本鉄鋼協会創立 50 周年の記念式典を挙行せられるにあたりまして、ここに関連学・協会を代表して一言お祝詞を申し述べる機会を得ましたことは、私の深く喜びとするところであります。

思うに鉄は文化のバロメーターと申されますごとく、まさしく鉄鋼業の発展はそのまま国民文化・経済の発展であります。事実、わが国経済が今日の如き繁栄を遂げるにいたつた過程の中におきまして、日本鉄鋼業の果して参りました役割りの大きさについては、すでに多くを語りつくされており、ここに改めて申し上げるまでもないことと存じます。

しかしわが国は、元来天然資源に極めて乏しく、鉄鋼業またその存立の基本的条件であります主要原料の大部分を、海外よりの輸入に仰がねばならぬ実情でありま

す。それにもかかわらず、よくその不利な条件を克服して、日本鉄鋼業に今日のごとき世界的地位をもたらしめ、かく目覚ましい発展を可能ならしめた要因は、どこに求められるべきでありましょうか。私はやはりこれは鉄鋼に携わる方々の絶えざる創意と工夫、これこそ、その最大の要因であり、原動力であつたと存するのであります。そしてその中であつて大正4年設立以来50年にわたる星霜を、この日本鉄鋼業のために鉄鋼技術の向上につとめ、もつて今日の輝やかなしい成果を築きあげられた貴協会のご功績は、けだし筆舌につくしがたいものを感じるのであります。私はここに心からそのご功績に限りない敬意を表明すると共に、その栄光の歴史をこめてかく盛大な祝典を挙行せられましたことに対し、衷心よりお祝いを申し上げる次第であります。

もとより、われわれ関連学・協会といたしましても、鉄鋼協会のこれまでの足跡を範となし、日本工業技術ならびに産業・経済の発展のため、今後とも相携えて、その実をあげるよう努力を傾注いたしたいと存するのであります。

ここに貴協会の一層のご発展を記念し、一言お祝いの言葉といたします。

日本鉄鋼連盟会長
永野重雄殿



このたび日本鉄鋼協会には創立50周年を迎えられ本日各国から多数の鉄鋼関係者首脳も列席されてかくも盛大な記念式典を挙行されますことはまことに慶賀にあらず衷心からお喜び申し上げます。

大正4年、同協会が鉄鋼に関する学術技術等の問題を

調査研究し、わが国における鉄鋼業の振興発達を期するため設立されて以来ここに早くも半世紀の歳月が流れました。

この間同協会の飛躍発展は申すにおよばず日本経済もまためざましい成長を遂げたのであります。なかんずく第二次大戦後の発展は、西独とともに世界の刮目するところであり今日のこの姿を外国からの来賓各位に目のあたり見ていただくことは、われわれの誇りであると同時に非常に光栄でもあります。

鉄鋼業におきましても数次にわたる合理化計画の遂行により今年年間粗鋼生産量は4000万トンを越え、ソに次いで世界第3位の製鉄国へと発展いたしました。

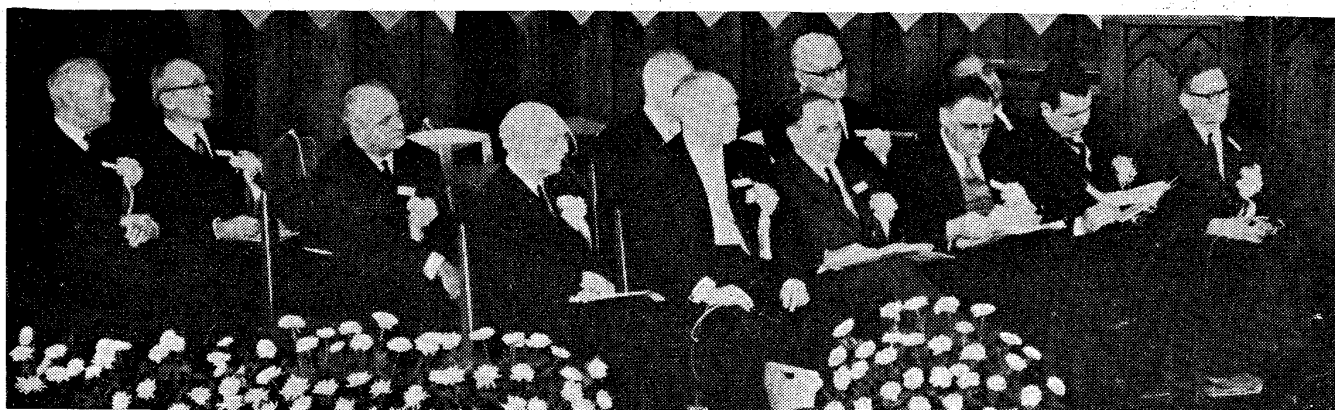
これは日本経済の発展を背景として日本の高い技術水準と勤勉さにより達成されたものであります。と同時に優秀な技術設備原燃料などを提供していただいた世界各国に負うところも大きかつたことをわれわれは忘れ得ないのであります。

このようにわが国は、量的には世界第3位とはなりましたが一国文化のパロメーターといわれる1人当り鋼消費量をみますと昨年やつと300kg台に達したばかりでスウェーデン、米国など欧米諸国に比較して遙かに少なく世界の数10位に甘んじております。この点から考えますとわが国の鉄鋼業はまだまだ発展の余地があるものと思われま。

また資源に乏しいわが国にとって貿易の振興は欠くことのできない必須の条件であります。わが鉄鋼業は、その生産量の20%余り、日本の総輸出額の10%強を輸出しわが国の外貨獲得に多大の貢献を行なつてまいりました。

われわれ鉄鋼業は、船舶、車輛、機械など加工業を通じて国内経済発展に貢献しております。今後ともわが国経済の発展を支える基幹産業としての重責を果しつつ国民の文化生活の向上に寄与すると同時に他方わが国の国際収支改善のための輸出振興をはかるべく一層の合理化と秩序ある輸出とを行なつてまいる所存であります。

日本鉄鋼協会におかれましても世界的水準を有するわが国鉄鋼生産技術の要として一層の飛躍発展をされるよう心からお祈りして簡単ながらお祝いの言葉といたします。



外国来賓祝辞

オーストラリア金属学会会長

Dr. R. C. Gifkins (Australia)

日本鉄鋼協会の会長、会員および来賓の皆様におーストラリア金属学会を代表してご挨拶と祝辞をお伝えすることができますことは、私の光栄とするところであります。

50年、すなわち半世紀という年月は、今日のように変動の激しい時代においては、いかなる人間活動にとつても長い時間でもあります。そして日本鉄鋼協会が創立50周年を迎え、その祝典をおこないますことは、はなはだ適切なことであり、また誠によるこぼしいことであると信じます。

長い歴史を持つ日本にとつて50年という時間はほんの短いものに感じられますが、日本鉄鋼協会の50年を考える際の対照は日本の長い歴史全体ではなく、日本がすぐれた工業国に成長してからの歴史であり、したがつてこの50年ははなはだ重要な意味を持つてまいります。すなわち、日本鉄鋼協会は日本が工業国となつてからの歴史においてその発展に重要な役割をはたしてきたわけであります。

オーストラリアは明確な歴史を持つて以来、わずか150年程であり、また自立国としては50年を越すに過ぎません。

したがつて、われわれオーストラリア人にとつて50年の年月は、さらに重要と考えられるのであります。

われわれオーストラリア人の見地からすれば、過去50年がいかに重要なものであつたかということははなはだ明瞭なことであります。

また、私は貴協会が日本において果してきたと同様にわれわれのオーストラリア金属学会がオーストラリアの発展に重要な役割をになうことを念願しております。

50周年を祝う大きな理由の1つは、貴会が過去50年

の間常に成長を続けている組織であり、集会、講演会、研究会、出版、お互の交流など絶えず新しい方法を探究して会員に奉仕することに努め、これによつて大いに日本の鉄鋼業に貢献してきているという事実であると確信します。

50年を半世紀と呼ぶことにより、われわれは過去50年を回顧すると同時に、次の来るべき半世紀を予期することができるのであります。

それゆえ、私は祝辞の最後に来るべき50年がさらに成功裡に発展することをお祈りして終りたいと思います。

オーストリア鉄鋼協会会長

Dr. Josef Oberegger (Austria)

日本鉄鋼協会会長およびご出席の皆様！

オーストリア鉄鋼技術協会 (Technischenwissenschaftlichen Vereins Eisenhütte Oesterreich) の議長として、またオーストリア鉱山鉄鋼連合会 (Fachverbandes der Bergwerke und eisenerzeugenden Industrie Oesterreichs) の会長として、私は日本鉄鋼協会の創立50周年記念式典に対し、オーストリア鉄鋼界の深甚な祝賀の詞をお伝えいたします。

オーストリア鉄鋼界は日本鉄鋼界とは特別な関係があると存じます。と申しますのは、オーストリアの技術者が開発した新しい製鋼法、すなわちLD法が他ならぬ貴国において、いち早く導入され、貴国の鉄鋼界で一層の発達を遂げ、その間非常に価値ある開拓者的研究が遂行されているからであります。

このような理由で、比較的多数のオーストリア技術者が貴国日本に滞在し、誰もが貴国の美しさ、文化、技術的発達および厚遇に感激し讚美して帰国しております。

1962年には、貴国の鉄鋼技術の業績が特に認められ、



オーストリア鉄鋼協会より寄贈の置き物
LD-グループの特別会議がここ東京で開催されました。

本年の5月28—30日の間「オーストリア鉄鋼技術協会」は創立40周年の記念祝典を挙行いたします。私達はその際日本鉄鋼界の代表者も歓迎することができれば、誠に欣快に存ずる次第であります。

私に授与されました日本鉄鋼協会名誉会員に對しましては、それはひとり私のみならずわが国鉄鋼界にとつて全く特別な名誉ある贈物であり榮譽であると存じ、皆様の無上の好誼に對し感謝いたします。

私は記念祝典を挙行された日本鉄鋼協会が、従来と同様将来においても、一層の成果ある発展を遂げられるよう念願し、オーストリア鉦山および製鉄人の心からのご挨拶をお伝えいたします。

(Oberegger氏は病気のため来日されませんでしたので祝辞は駐日オーストリア大使館 Klaus Ziegler氏が代読されました)

ベルギー鉄鋼連盟会長

Dr. P. van der Rest (Belgium)

本日、ここに日本鉄鋼協会創立50周年記念式典にお招きをうけお祝辞を述べることが出来ますことは私にとつて非常な喜びであり、また、大きな名誉であります。

私が喜びを感じておりますことは、今回は私が日本を

訪れる最初の機会であり、この美しい国を知ることが出来るからであります。

それに加えて、私はいままで日本鉄鋼業界における卓越せる代表の方々にお会いする機会をしばしばもっております。たとえば1963年にブラッセルで、日本鉄鋼業の主脳を伴つた鉄鋼連盟会長を歓迎しております。このようなことから、私のこのあまりに遅すぎた感のある訪日は、あなた方のベルギー訪問に対する答礼としてお受けとりいただきたいのであります。その他、私が委員長を数年にわたりつとめたヨーロッパ経済委員会の鉄鋼委員会 (The Steel Committees of the Economic Commission for Europe) などの技術的、経済的会合では、日本のすぐれた代表の方々に何人もお会いしております。

広く知られたことですが、日本鉄鋼業は、鉄鋼に関する会合につねに熱心に代表を派遣しておられます。これ



ベルギー鉄鋼連盟より寄贈のメダル



CNRMより寄贈のメダル

により数多の人と知り合うことができ、今度この東京でその方々に親しく語り合えることができるものと、喜びを一層大きくしております。

さて、日本鉄鋼協会のこの輝かしい大会にご挨拶申し上げますことは無上の光栄であります。

貴協会が催される年次大会は、つねに国際的関心をかき立てており、事実それは日本の金属学者、技術者の業績を周知せしめる機会と存じます。

私があえて付言するまでもありませんが、ベルギーでは、鉄鋼関係者はあなた方の業績に非常な関心を示しており、それらから利するところ大であります。

さて本日の大会は、従来と異なつた意味ではなほだ意義あるものと思います。何故ならば、1915年に設立以来今回はその 50 周年を記念するものであるからであります。

日本の鉄鋼業は、その揺らん期には、粗鋼生産量は年間 100 万トンにも満たないものでありましたが 1964 年には 3900 万トンを超え、これは世界第 3 位の地位を占めるものであります。この驚異的發展を顧みます時 1915 年に工業の發展を目的としてこの協会を設立した先覚者の洞察力に賛辞を呈せざるを得ません。貴協会の日本金属学会と日本學術振興会と密接にタイアップせる協力により達成された學術・技術的研究成果がその大發展の一翼を担っていることは疑う余地がありません。また、貴会の共同研究の推進のもと、絶えず設備を近代化し、つねに進歩の先端を歩みつづけた非常な努力の結果でもあります。

私は、いくつかの工場を訪問することに大きな期待を抱いておりますし、また、私をご親切にもお招き下さつた皆様方に感謝しております。

おわりに、私を日本鉄鋼協会の名誉会員にして下さることに深く深く感謝の意を表するものであります。日本鉄鋼業のエリートの方々に私の名前を連ねることができ、それは非常な榮譽であり、私の特に誇りとするところでもあります。

以上、私の感謝の意に加うるに、このめでたい時にベルギー鉄鋼業の心からの祝意を日本の友人の方々にお送り致します。

欧州鉄鋼情報センター会長

Mr. H. Malcor (France)

本日、日本鉄鋼協会創立 50 周年記念式典に臨み、フランス鉄鋼業および本式典に列席の榮を与えられたフランスの人々を代表して日本鉄鋼協会に対し祝辞を述べる

ことができますことは、私の最も喜びとすることであり、

近代日本鉄鋼業の特長である極めて高いレベルの生産性と品質に到達するため日本鉄鋼業が払われた感銘すべき努力に対しわれわれは賞讃を惜しまないものであります。

この成果をあげるため日本鉄鋼協会が非常に重要な役割を演じたことは疑う余地のないところであります。50 年の間、信じられぬ程のいろいろの困難に直面してきたにもかかわらず、つねにより良い素晴らしい成果をあげるべく努力してこられました。これは皆様の勇気と忍耐のたまものであり、われわれの深く敬服するところであります。

私は日本鉄鋼業の将来は一層輝しいものとなり、より多大な成果が挙がるものと確信いたしております。

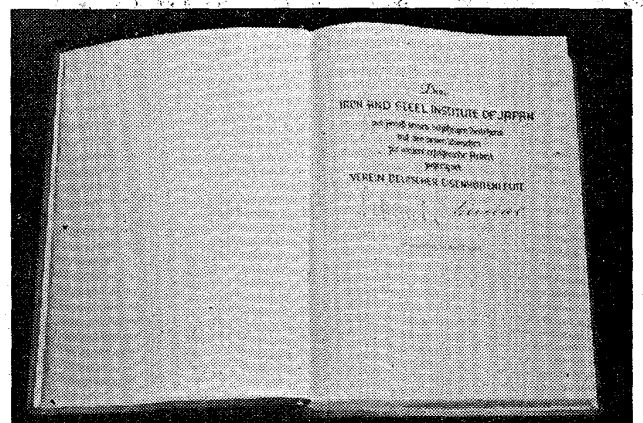
終りに臨み貴協会の今後の繁榮を心から祈ります。

ドイツ鉄鋼協会会長

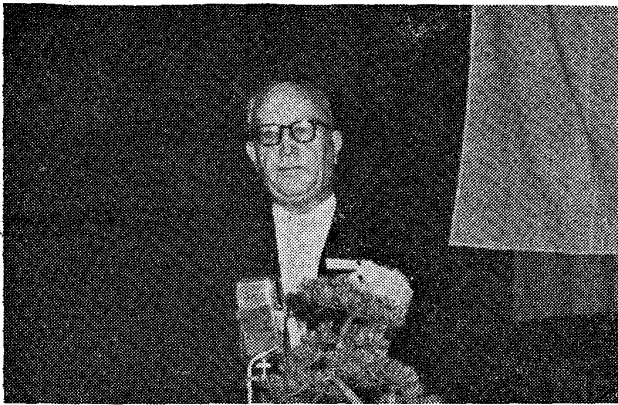
Prof. Dr. H. Schenck (Germany)

日本鉄鋼協会会長および皆さま！貴協会の 50 周年祭は今世紀の初め以来日独の鉄鋼協会会員を結びつけている友好関係を想起させます。如何なる政治上の混乱もわれわれ相互間の認識を低下せしめることはできません。それはわれわれ日独の鉄鋼協会会員が、国民福祉増進の基となる経済に基盤を与えるという特別なる名譽を担っていることをお互いに知っているからであります。

この名譽ある任務はあらゆる国の製鉄人に多くの困難な問題を提起します。しかしながらこの問題の解決には、日本においては原燃料の不足のため、特に苦勞の多い努力を要することをわれわれは知っています。偉大な日本国民は、日本経済に健全な基盤を与える手段と方法を見出せることを信じています。他方日本国民は実に有



ドイツ鉄鋼協会より贈られた“鉄の歴史”



祝辞を述べる Schenck 博士

能な勤勉な国民でありまして、日本経済のために総ての精神のおよび肉体的能力を動員する任務を遂行しています。

われわれドイツの鉄鋼人は日本の皆様が貴協会機関誌「鉄と鋼」誌に載せられる数多くの研究の結果に興味をもって注目しています。特に 1960 年に海外版を出すことにより、言語の相違という難点を少なくすることを決意されたことは非常に価値あるものであります。

最も大きな関心をひくのは日本鉄鋼業が賢明なる計画、良好なる経済性、優秀な製品に対しすぐれた範を示されたことであります。私達はこの成果に日本鉄鋼協会の努力が与つて大きな力があつたと信じています。

会長殿！ 人が 50 才になりますと多くの友人が集まつてきて祝いの言葉をいつてくれます。しかしながらそれら友人達はその人の一生のすばらしい半生が過ぎ去つてしまつていて、そしてその人にとってはただ老いてゆくのを待つのみという事実を認めないわけにはゆきません。これに対し、貴協会のごとくそれが活発な活動および精神力の競争により常に新しい生命を得、かつ友好と相互認識を基礎として、その技術を世界のあらゆる国と交換することのできる機関の記念式典の場合は、それ以上に非常に喜ばしいことであります。

会長殿！ 貴殿および日本鉄鋼協会にドイツ鉄鋼協会、理事および会員のご挨拶およびお祝いの言葉をお伝えすることは私にとって光栄であり、また大きな喜びであります。何故なら私は 10 年来貴協会の名誉会員であり、またその時以来日本の多数の皆様と友好的な関係を結んでいるからであります。

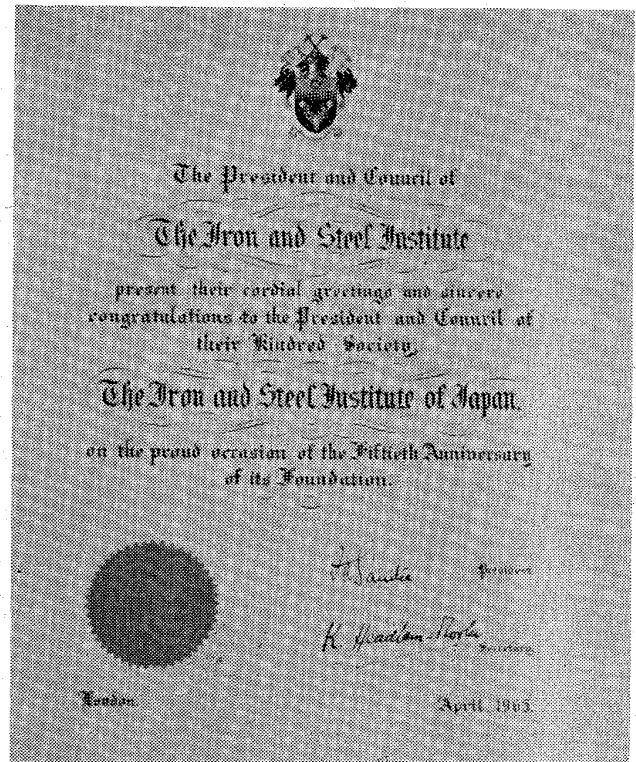
われわれ 2 つの協会の結合のささやかな記念としてドイツ鉄鋼協会が上梓した「鉄の歴史」という本を皆様にお贈り致します。われわれの日本の姉妹協会たる皆様にドイツ鉄鋼協会の心からの祝辞をもつてご挨拶と致します。

コルヴィル製鉄名誉会長

Sir Andrew McCance (Great Britain)

日本鉄鋼協会会長および皆さん！ この感激溢れる式典に臨み貴協会との姉妹協会たるイギリス鉄鋼協会会長および理事会よりのつぎのご祝辞をお伝えできますことを無上の光栄に存じております。

日本鉄鋼協会創立 50 周年式典にあたり、貴協会会長および理事各位に対し、その姉妹協会たるイギリス鉄鋼協会会長および理事会は心よりのお祝辞をお送り致します。



英国鉄鋼協会よりの祝辞状

イギリス鉄鋼協会会長

フランク・ヘンリー・サニター

同 専務理事

ケンネス・ヘドラム・モーレー

会長および諸君

一昨年以來両協会の間において技術視察団の交換が行なわれましたが、その結果、相互の技術的問題および技術向上における認識を深め合うことができました。

われわれは昨年 5 月英国鉄鋼協会春季大会にご出席下さいました、貴協会会長および訪英視察団の皆様にごで再びお会いできましたことを深く喜んでいます。

ここに、会長殿にわれわれの協会の会長、理事および協会会員全員に代わつて、このメッセージを今後も深い友情を保つきづなとして贈り、さらに深い協力を続ける

ことを切望いたします。

インド国立冶金研究所所長

Dr. B. R. Nijhawan (India)

日本鉄鋼協会創立 50 周年記念式典にあたり、インド鉄鋼業界ならびに、インドにおける代表的冶金研究機関である国立冶金研究所 (National Metallurgical Laboratory) を代表致しまして心からの祝辞を申し述べますことは、私の喜びとするところであります。

日本鉄鋼協会のごとき、学究的な機関の鉄鋼業界の発展に果たす役割は極めて大きなものがあります。年間鋼塊生産高ほぼ 4,000 万トンを達成し、世界鉄鋼業界において第 3 位という現在の地位にまで日本鉄鋼業界を成長せしめたのは、疑いもなく、日本鉄鋼業界に最新の技術革新を普及させた日本鉄鋼協会の功績によるものであります。鉄鋼生産の原料のほぼ全量を輸入に依存しているにもかかわらず、日本鉄鋼業界は、年間鉄鋼生産 t 当り最少の資本投下率を記録したのみならず、鉄鋼製品の最適品質と高い生産性を維持しかつ低生産コストを達成しております。第 2 次世界大戦以後に成し遂げた日本鉄鋼業界の復興ならびに成長は確かに世界の一流の鉄鋼生産諸国の賞賛と羨望的であります。インド鉄鋼業界は日本鉄鋼業全体といろいろの意味において密接に連つております。ここに創立 50 周年式典にあたり日本鉄鋼協会に心からのお祝いを申し述べると共に、今後も引き続き成長され、大いに発展されることをお祈り申し上げる次第であります。

FINSIDER 鉄鋼研究所所長

Prof. Dr. A. Scortecchi (Italy)

日本鉄鋼協会 50 年祭は、文明の先達ともいべき諸国家にとって意義深い日を劃するものであります。

日進月歩の勢で速さと量を増す通信の発達と、絶えず発展する国際貿易は、ヨーロッパにおいて偉大なる日本に関する認識を改めるのに十分なものがあります。今日われわれが入手できる科学、技術、経済上の情報によって、われわれは鉄鋼が日本の発展にいかにか大きく寄与したかを的確に理解することができ、また他方、われわれは歴史的、哲学的見地から、そもそも日本のかくも目覚ましい発展の草創期に鉄鋼が密接に関与し著しい影響をおよぼしたことを理解できます。

一国の発展は実にはその国民の創造性の集約、二には他国民の創造性に由来する価値ある経験をいかに敏

速に吸収活用するか国民の能力によつて定められます。

つい最近まで、貴国は主として芸術など高度に精神的なものすべての面における一般国民の感受性の強さの故に知られていたものであり、これらはすなわち物質世界と超越界との境に位置する最高の水準を行く本質的創造性の真の特性であります。

欧州協力開発機構 (European Organization for Cooperation and Development) には現在日本もメンバー国として加盟しており、私も過去 15 年間それに関係して来たのでありますが 1964 年の 6 月に開かれたその研究委員会第 1 回会合の席上日本代表が発表した報告中に次の記述があります。

「いうまでもなく、科学の探求には 2 つの目的がある。1 つは事実と真実の追求であり、他は人類の経済繁栄と福祉に資することである。われわれは真実と普遍の探求は如何なる代償を払おうともそれ自体の価値において考えられねばならぬと確信し、この理由故にこそ、科学者に対してはその自発的創造性のために、最適の環境その他が保証されなければならない。」

貴国の成功の鍵は実にここにあります。貴国は、すべての素質の中で最も崇高なるもので、確かに日本国民が豊かに恵まれている本質的創造性を科学的、工業的、経済的、社会的目的のためにも生かしたのだと思います。貴国は発展に導くいろいろの手段、その筆頭は勿論教育であります。そのすべてに着手されたのであります。貴国は何よりもまず先進諸国の最善の経験を自家薬籠中のものとし、そのため古い歴史を持つヨーロッパや米国の大学に多数の留学生を派遣したのであります。

貴国は今やその叡智の果実の収穫を取り入れようとしています。貴国の科学者達は国際的に著名であり、貴国産業の指導者達はその有能を以つて不動の名声を確立しています。また貴国経済は年を追うて成長強化の途上にあります。今日まで極めて競合的な価格で知られていた日本製品は、今や品質の点においても広く認識を新たにせしめています。日本の鉄鋼生産は 1954 年に従来の最高である 1942 年の水準に復した後、さらに急速に成長して 1964 年には 3 千 9 百万トンという最高水準を達成、西ドイツを抜いて世界第 3 位となりました。今日日本は先進国の仲間入りをし、後進国がより高い福祉水準に達するよう援助することのできる先進国グループに属しています。

われわれは日本の発展に鉄鋼が必然的に果たした役割を完全に評価するためには、鉄鋼業と資本財生産部門との間の密接な相関々係を考えをいたすだけで十分であると

考えます。一般的には貴国、具体的には貴国鉄鋼業は、実に偉大な能力を有する指導者層をいかに敏速に生成せしめたかの素晴らしい实例であります。

以上の理由があればこそ、日本鉄鋼業界の権威ある代表としての鉄鋼協会 50 年祭がすべての文明諸国にとって記念すべき行事なのであると思います。

私はこの祝典に、哲学、科学、芸術の進歩に著しい伝統を擁するヨーロッパ最古の国家の1つであり、トーマス・アキナス、ダンテ、ミケランジェロ、レオナルド・ダ・ビンチ、ガリレオ、フェルミらを輩出した国を代表して出席することを名誉に思います。ここにわが国を代表し、特にイタリア鉄鋼業界の名において、私は貴協会 50 年祭に衷心より慶賀の意を表し、世界平和、相互理解、互助の精神に基き、人類幸福のための努力が一日も早く結実するよう祈ります。

ラテンアメリカ鉄鋼協会会長

Dr. Carlos Prieto
(Latin America)

皆様！ 日本鉄鋼協会創立 50 周年記念式典に臨席の榮譽を得ましたことは、メキシコおよびラテンアメリカ鉄鋼業代表として、また私個人としてはなほ喜びとし、かつ名誉とするところであります。

私達にとって日本は関心の的であり、またその歴史は私達に重要な教訓を与えてくれます。

すなわち、その独得な性格、歴史的歩み、問題点、国家的背景、自然美、創造精神すべてが、深い関心を持つて日本を注視している人達に深い感銘を与えています。しかしこの感銘と教訓は、日本鉄鋼業の進歩に警嘆の念を持つてみまもつている世界の鉄鋼人にとっては、一層のものだと思います。

すなわち、鉄鋼の分野において、日本人のその偉大な特質、すなわち才能、組織、技術包容力、能力、勇猛心、日本の将来に対する確信は戦後の各種の問題を克服するという試練を経て、さらに 1955 年には 940 万トン 1960 年には 2,210 万トンそして 1964 年には 3,950 万メトリックトンを達成し、日本を世界第 3 位の鉄鋼生産国にさせたのであります。

昨年私は八幡製鉄および富士製鉄の主要工場を訪問して、個人的に両社の方々と会見し、組織、チームワーク、機械化およびこれら工場の卓抜した擦業について詳しく知ることができるという非常に恵まれた機会を得ました。これによつて私は日本で達成されている生産増加、高品質、高歩留の秘密を知ることができました。この度

の喜ばしい記念式典の機会にさらに幾つかの他の工場を視察し、日本の鉄鋼会社ならびに関係者についての私の知識を完全なものにしたいと考えております。

日本鉄鋼協会に対し敬意を表すべきこの式典に親愛なる日本の鉄鋼関係者の皆様と同席する喜びは私に与えられることになった貴協会の名誉会員という貴重な称号の授与により倍加され、さらにこのことは私個人にとつてもまた私が会長の任務を汚しておりますラテンアメリカ鉄鋼協会 (ILAFA) のメンバーである産業人達にとつても最も記念すべき瞬間たらしめるものであります。私はこの名誉はラテンアメリカで鉄鋼業の発展のために一路邁進しているわれわれの努力に対し与えられたものと解釈しています。われわれはまだ出発の途上にありまして 1964 年には約 800 万トンの鋼を生産したばかりであります。向う 5 年間でこれを倍増する計画であります。

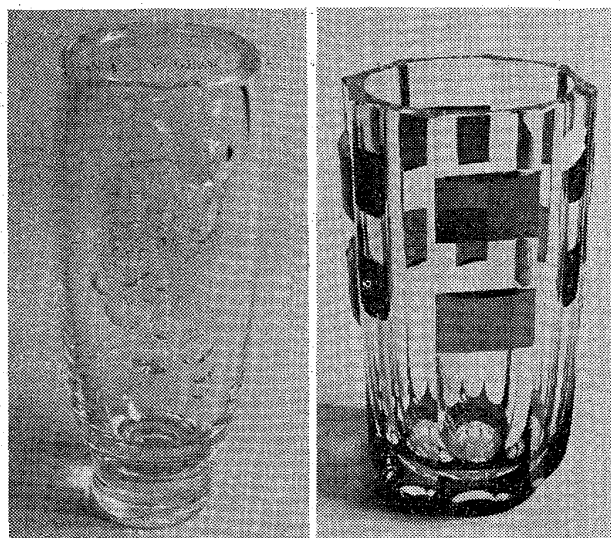
このわれわれの努力に対し、日本の発展の实例は勇気を与え奮起を促すものであると信じます。

ローヤルオランダ製鉄会社、専務取締役
Mr. Alexander Drijver
(The Netherlands)

会長、理事諸賢およびご出席の皆様！

日本鉄鋼協会、創立 50 周年祝典に際し、オランダ鉄鋼業界の代表の一員として、また、本日より新たに貴協会の名誉会員として、日本鉄鋼協会会長ならびに同協会に対しお祝の言葉を申し述べることが出来ますことは私の最も欣快とするところであります。

日本鉄鋼協会が私にお与え下さいましたこの榮譽は、17 世紀の時代よりの日本、オランダ両国民の関係にさら



ローヤルオランダ製鉄
より寄贈の花瓶

CNRM より寄贈の
カットグラス

に新たな関係が加えられたものと考えます。このことに
関し日本とオランダとの交易は 1641 年に日本の出島に
設けられたオランダの居留地において始められたという
ことをここで改めて申し上げたいと存じます。

日本鉄鋼業の過去 50 年間の歴史を顧みまするに、特
に私共の感銘を深からしめることは、この 10~15 年の
間に現在の近代化された形態に至らしめた急速な発展で
あります。1963 年に日本の鉄鋼業を見学いたしました
折、急速な発展途上にある鉄鋼業の数々の製鉄所を見る
機会を得、拡張計画の準備より完遂に至るまでの卓抜し
た努力には深い感銘を受けました。さらに、各部門での
実際の生産トン数、研究に対する多大の関心、そして迅
速かつ十分に考慮を払った上での新技術の導入など大変
感嘆いたしました。これらの顕著な業績に貴鉄鋼協会は
多大の貢献をされたものと確信いたしております。

貴国の約 10 分の 1 の人口と鉄鋼一貫製鉄所を 1 つしか
持たないオランダのような国においては、かかる鉄鋼業
の共同の組織を設立することができないことは非常に残
念なことであります。このような理由から、私共は、英
国鉄鋼協会およびドイツ鉄鋼協会など近くの国の類似の
機関に加入せざるを得ないのであります。

終りに平和世界において貴日本鉄鋼協会が今後ますます
発展されんことをお祈り申し上げ、同時に貴協会が私の
妻ならびに私にお寄せ下さいましたご厚遇に対し厚くお
礼を申述べさせていただきます。

スウェーデン鉄鋼連盟会長

Mr. H. Abenius (Sweden)

スウェーデン鉄鋼業およびスウェーデン鉄鋼経営者連
盟の代表として、日本鉄鋼協会 50 周年に際しご挨拶と



スウェーデン鉄鋼連盟より贈られたグラス

心からのお祝辞を贈ることができまことを深く喜ぶと
ともに名誉に思っております。

われわれは、日本鉄鋼業が急速な発展をとげて真に世
界的工業となつたことに対し、最大の尊敬と賞賛を捧げ
るものであります。昨年度においては、日本は世界第 3
位の製鉄国となりました。その生産性は高くかつさらに
増大しつつあります。最新の技術と堅実な計画によ
つて操業効率は高度なものとなり、一方生産コストは非
常に低い水準にまで下げられました。

純酸素転炉製鋼法は、粗鋼生産においてははなはだ大き
な比率を示しており、1970 年までには、全生産量の半ば
以上を酸素製鋼が占めるようになると思われま。加う
るに、連続鑄造は分塊ミルにとつて代るでありましよう
し、コンパクトな工場は素材の運搬などの手間を最小の
ものにするでありましよう。鋼製品の新分野への応用の
開発には、多大の関心が払われており、この点日本の進
歩した技術は非常な助けとなるでしょう。

1958 年から 63 年までの間に、全研究関係支出は 150%
も増大しました。過去数年間にはかなりの数の新研究所
が設立されました。

貴協会の研究活動およびその著しい業績は第一に実際
的な現場応用面に向けられておりますが同時にあらゆる
重要な基礎的な研究にも多大な力が払われていると承つ
ております。国際競争は実際厳しいものであります。し
かし、われわれ皆がフェアプレーの精神でその競争を
行なうならば、貴国も我国も信頼をもつて将来に立ち向
うことができると思います。

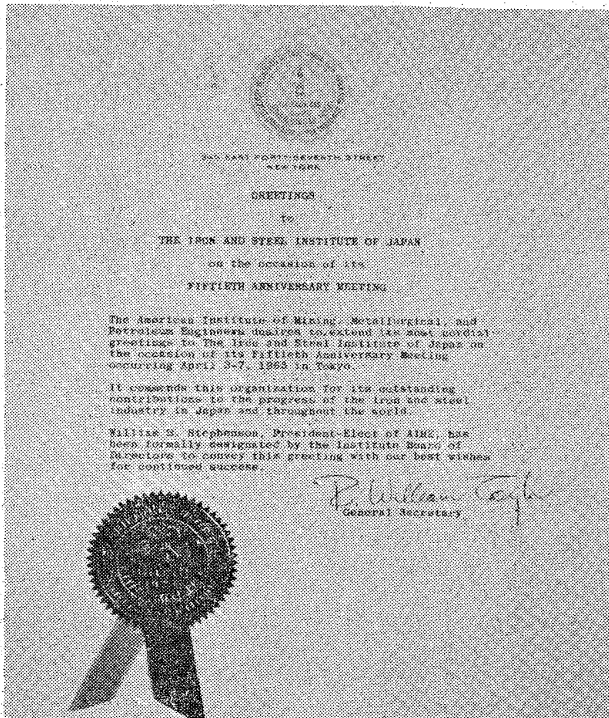
スウェーデンの同業者を代表し、また私個人としても、
日本鉄鋼協会および日本鉄鋼業に従事されるすべての方
々が、貴国のためにも、また、全世界の経済と技術の発
展のためにも今後ますます成功を続けられますことをお
祈り申し上げます。

MIT 名誉教授

Prof. Dr. J. Chipman (U.S.A.)

この数年間多くのアメリカの冶金学者達が日本を訪れ
ましたが、彼らはすべて非常に深い感銘をうけて帰国し
ています。彼らは日本の産業とりわけ鉄鋼業の驚嘆すべ
き進歩を報告しています。われわれは日本の高炉および
LD 転炉の著しい生産性に関する報告書に驚嘆しており
ます。

また日本を訪れた人々は日本の方々の外国人に対する
親切さ、外来者の歓迎について示される深い関心に心か
らの感謝の念を持つて帰国しています。すべての来訪者



AIME よりの祝辞状

は日本の風土、庭園、よく管理された田園風景の美しさに感嘆しております。彼らの報告書は私をしてこの美しい国を訪れたい欲求をそそりました。

このたびの機会に皆様と同席することを得ましたことは私として極めて幸甚に存するものであります。私はアメリカ鉄鋼業公式代表としてではなく、製鉄、製鋼の化学工程に関心のある研究者としてまいりました。私は非公式ではありますがアメリカの冶金学者に代りご挨拶と心からのお喜びを申し上げる次第であります。

欧州石炭、鉄鋼共同体本部鉄鋼総局長
Mr. F. Peco

私は、帝国政府や欧州共同体の国々などの、科学および工業界から来られた令名ある方々と同様に、欧州炭鉄共同体ならびにその代表者たる Professeur Del Bo の名において、最も熱誠のこもった祝辞を申し述べることをお忘れなきようお願いいたします。そしてこのことは Directeur Général Reichling と私に委ねられていることであります。

私が本日ここにもたらしたものは、炭鉄共同体の公式のご挨拶であります。この共同体なるものは、新らし

いヨーロッパの中に、鉄鋼と石炭の分野における利益のために形成されたものでありまして、一定の計画の下に一国の政府の権威にも比すべき運営を行なっております。

日本の全く目覚ましい鉄鋼界の成果—それは非常に大きな部分を、貴協会の創意に富む精神と高い科学的能力とに負っているのに違いないのでありますが一これに対し炭鉄共同体の最高機関は決して無関心であることはできないのでありまして、ここに、貴協会が過去 50 年間に立派に成し遂げた驚異的な成果に対し最大の賛辞を呈したいと思うのであります。

日本は、科学の基礎的研究、技術の応用的研究および経済構造の基本的研究の各分野における組織的努力と、これら研究の結果を開発するための勇気および忍耐とをもって、数々の成功を産み出し得るものであるということを示しました。

日本の鉄鋼業は過去においてそうであつたごとく、将来においても日本の経済および外国貿易の発展上一大原動力として存在し続けることでありましよう。そして世界計画における鉄鋼経済の競争場裡に次第にその名を記入されることと思ひます。私どもの見解によれば、この世界計画において最も強く要請されることは、“経営条件の安定”という言葉によつて発展を支配することであります。安定の維持は調和の中において醸成される発展であつて、無秩序の中のそれではありません。

それ故に私どもは、鉄鋼界の諸問題に深い関心を寄せている数々の国際大機構の事業に、深い親愛の情をもつて日本の加入を呼びかけたのであります。それら機構の仲介によつて、ヨーロッパとの接触は強固に打ち建てられ、その成果は実のり多いものとなるのでありましよう。

炭鉄共同体の最高機関は、日本とその鉄鋼業および鉄鋼協会との関係を一層親密に発展させる相互の協力と、さらに開放され、しかも果敢に行なわれるであろう競争とに対し、十分な用意があります。

この方法によつて、われわれはともに、生産者には進歩の中における健全な発展を、消費者には公正にして安定した供給を、そして結局これは当然に、必要な産業化、望んでいる合理化の進路であることを確信させることができるものと信じます。このような確信の下に、私は日本鉄鋼協会の隆盛と、日本鉄鋼業の繁栄とを繰り返し希望するものであります。

1.3 特 別 表 彰

創立 50 周年記念事業委員会内に設けられた褒賞小委員会では、創立 50 周年記念特別表彰について慎重に検討した結果、新しく国際的な賞として「褒賞」を設け、鉄鋼業の進歩・発達または学術・技術の研究開発に画期的功績をあげた功労者を表彰することになりました。また本会創立以来 10 周年ごとに授与されてきた、製鉄事業ならびに協会事業に対する功労者の表彰も併わせて行なわれました。三賞受賞者は次のとおりであります。

1) 褒 賞 (金牌および副賞)

本賞は俄国一博士の遺徳を讃え、創立 50 周年を記念して設けられたもので、国の内外を問わず鉄鋼業の進歩発達または学術、技術の研究開発に画期的功績があり、国際的に声誉ある者に授けられることになり、第 1 回の褒賞受賞者は下記の通り決定いたしました。

褒賞受賞者

磁石鋼その他の発明、業界の指導、後進の薫育
東京大学名誉教授、前会長

三 島 徳 七 君

三島徳七博士は、大正 9 年、東京帝国大学工学部冶金学科を卒業、翌 10 年には同大学の助教授に任ぜられ、製造冶金講座を担当、昭和 3 年には工学博士の学位を授与された。昭和 13 年には東京大学教授に任ぜられ昭和 28 年定年退職されるまで実に 30 有余年にわたり、わが国鉄鋼研究者、技術者の育成指導に当られた。この間博士はまた関係学協会の業務に



参画され、特に本会においては会長を 2 期 (第 16 代、第 24 代) 務め、戦後の多難な時代に対処せられ、また協会事業の拡大強化に尽力され協会の今日を築く原動力となつた。その他日本金属学会、日本鑄物協会の会長、学術振興会第 24 委員会委員長などを歴任、また学界、業界の調整役としてその活動は極めて広範囲にわたっている。

博士の研究業績は特殊鋼、特

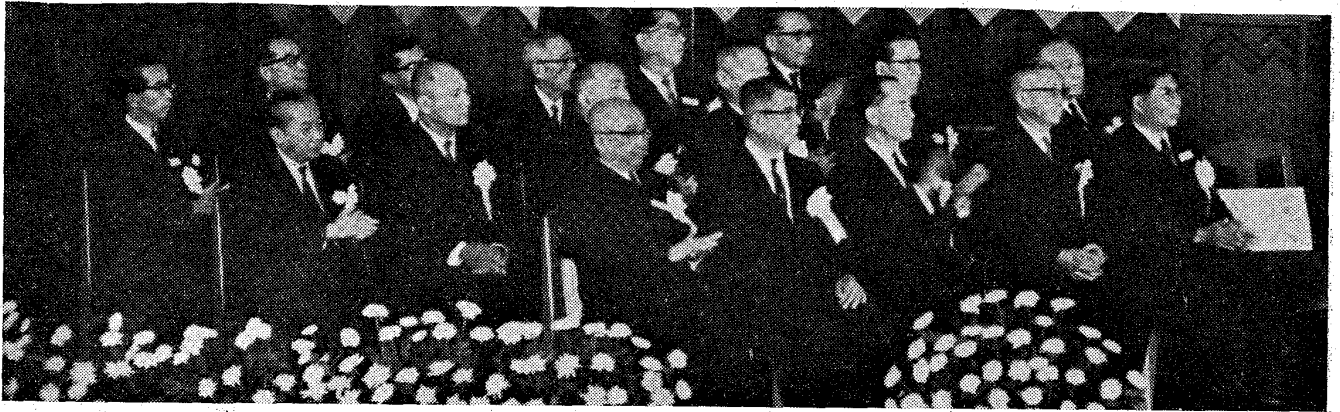
殊合金の種々なものにわたって広汎であるが、なかでも最も重要で世界的に著名なものは MK 磁石合金の発明である。それまでの Fe-Ni 合金の磁性特性の研究を行ない、これに Al を添加すると磁氣的に興味ある現象のあることを認め、その物理性質におよぼす影響を実験追求して、析出分散型強力磁石を創始したもので、永久磁石材料の進歩、研究のうえに画期的意義を有し、かつ大きな刺戟を与え、その後における研究の著しい進展に原動力の役割を果たした。

MK 磁石鋼の優秀性は日本国内のみならず、欧米主要国においても高く評価され、昭和 8 年より世界各国において製造を開始、電子工業をはじめ航空機、計測器、自動車、制御装置の進歩にまた近代産業の発展に画期的な貢献をし現在にいたっている。

博士はその研究業績により、文化勲章 (昭和 25 年)、帝国学士院恩賜賞 (昭和 20 年)、帝国発明協会恩賜記念賞 (昭和 13 年)、日本鉄鋼協会香村賞 (昭和 8 年)、日本鉄鋼協会褒賞 (俄論文賞・昭和 33 年)、日本金属学会賞 (昭和 36 年) などの各賞を受賞されたほか、アメリカ金属学会より Albert Sauveur Achievement Award (昭和 32 年)、イタリア冶金協会より Luiji Losana Gold Medal (昭和 37 年) を受賞、博士の研究成果がいかにか世界的なものであるかを物語っている。また博士は英国鉄鋼



俄ゴールドメダル



協会 (昭和39年), フランス金属学会 (昭和39年) の名誉会員に推挙された。

2) 製鉄功労賞 (賞状および賞牌)

本賞はわが国鉄鋼業の進歩, 発達または学術, 技術の研究開発に特別の功労のあつた下記の9氏に授与されました。

製鉄功労賞受賞者

高級鋼管製造技術の開発

住友金属工業株式会社専務取締役

小田 助 男君

独創的設計による銑鋼一貫工場の建設, 操業

大阪製鉄株式会社会長

高石 義 雄君

特殊線材および溶接棒製造技術の開発

株式会社神戸製鋼所社長

外島 健 吉君

純酸素転炉の導入開発

日本鋼管株式会社常務取締役

富山 英太郎君

科学技術の振興, 金属材料技術研究所の設立, 整備

科学技術庁金属材料技術研究所長

橋本 宇 一君

わが国におけるストリップミルの創設,

同技術の導入開発

富士製鉄株式会社副社長広畑製鉄所長

平世 将 一君

鉄鋼技術に関する人材の育成

東北大学名誉教授

的場 幸 雄君

大型鑄鍛鋼および高級厚板製造技術の開発

株式会社日本製鋼所社長

柳 武君

戦後の鉄鋼業の復旧, 合理化の推進,
ウジミスナ製鉄所の建設

八幡製鉄株式会社副社長

湯川 正 夫君

3) 協会事業功労者 (賞状および記念品)

本賞は本会事業推進のため特別の功労のあつた下記の9氏に授与されました。

協会事業功労賞受賞者

トピー工業株式会社専務取締役

伊木 常 世君

三菱製鋼株式会社大島製作所副所長

内山 道 良君

日本鋼管株式会社取締役技術部長

桂 寛一郎君

東京工業大学教授

作井 誠 太君

八幡製鉄株式会社常務取締役

武田 喜 三君

早稲田大学工学部教授

長谷川 正 義君

東京大学工学部教授

松下 幸 雄君

富士製鉄株式会社取締役中央研究所副所長

村田 巖君

日本鉄鋼協会参与

橋本 芳 雄君

受賞者代表謝辞

俵賞受賞者

三島 徳 七君

お礼を申し上げます。

湯川会長, 来賓各位ならびにご来場の皆様, 本日日本

鉄鋼協会創立50周年の記念式典が行なわれるにあたりまして、新しく制定されました俵賞の第1回受賞者に不肖私を選ばれましたことは誠に身にあまる光栄でありまして感謝感激に絶えない次第であります。

俵国一先生は、日本鉄鋼協会の創立者であられまして、またわが国の鉄冶金学の生みの親として学徳ともに高しかる人々から敬望の的であつたお方であります。その上に、私は長い間先生より親しくご薫陶を賜りました弟子であります。先生は、私にとりましては忘れられない恩師であります。

このような話を総合いたしますと、本日俵賞を私が受けたということは、誠に幸せなことでありまして。終生忘れることのできない光栄であり、喜びであります。

誠に簡単であります。これをおもひまして私の言葉といたします。ありがとうございました。

製鉄功労賞受賞者代表

平 世 将 一 君



ただいま功労賞をいただきました皆様を代表いたしましてお礼の言葉を申し上げます。

この日本鉄鋼協会 50 周年という非常に思い出多い嬉しい日にあたりまして、しかも多数の外国の来賓の方々を迎え、かつまた会員はじめわれわれ協力者の方々の前におきまして、この栄誉ある表彰をいただきましたことは、身にあまる光栄と考えまして厚くお礼を申し上げる次第でございます。

われわれは鉄鋼にたずさわつて、永年十分の職績をつくさなかつたので、かくのごとき栄誉をいただくのは、はなはだ恥ずかしい思いがいたすのでございますが、年齢のせいと申しますか長く仕事に携わつたということの労の心ざしか今回の栄誉をあずかりましたことは、このうえない名誉でございますし、永遠に忘れることのない嬉しい嬉しい記憶になることと存じまして、今後もこの栄誉にたがわないよう今一層の貢献をいたしたいことをお願いいたしましてお礼の言葉にいたします。

協会事業功労賞受賞者代表

伊 木 常 世 君



一言僭越ではございますが功労者を代表させていただきますまして、お礼を申し上げます。

本日は鉄鋼協会の 50 周年の記念式典に際しまして、私どもに協会事業功労賞を頂戴いたしまして誠にありがとうございます。

私どもただ会員といたしまして、わずかにその義務をはたし得たに過ぎませんのにかかわらず、本日過分の表彰をいただきまして何とお礼を申し上げてよいのかわからない次第であります。誠にありがとうございました。今後私どもいささか微力ではございますが、できるだけ鉄鋼協会の仕事に尽力いたしたいという覚悟でございます。はなはだ簡単でございますけれども一言お礼の言葉に変えたいと思います。どうもありがとうございました。

1.4 新 名 誉 会 員 紹 介

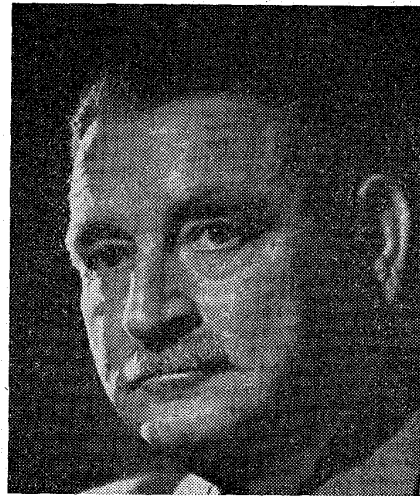


Dr. Robert C. Gifkins (Australia)

オーストラリア金属学会会長

1918年にロンドンに生れ、1964年にオーストラリア金属学会の会長に選ばれたギフキンス博士は、イギリスおよびオーストラリアにおいて輝かしい経歴をもっている。1940年氏は、国立物理研究所の冶金部門の担当員となり、純鉄の製造、銅ニッケル合金の樹枝状結晶、合金鋼の応力腐食等々の研究に励んだ。この期間に氏は、金属組織学の応用に興味をもち、その後この方面の研究がオーストラリアにおいて一層進んだのである。

1948年氏はメルボルンの国立科学工業研究所物理冶金部門のスタッフとなるためイギリスを去った。彼は多くの著書を出し、講演を行ない、またアメリカ、ドイツ、オーストラリアの科学技術誌に多くの寄稿をしている。1960年に氏の研究は、メルボルン大学の論文審査会に認められ、Doctor of Scienceの学位を授与された。氏は現在オーストラリア金属学会会長の職にあつてその重責を果している。



Dr. J. Oberegger (Austria)

オーストリア鉄鋼協会会長

1896年オーストリアのLeobenに生れた氏は、1918年にレオベン大学で鉱山学を学び'22年に卒業した。卒業後直ちに、オーストリア・アルピネ鉱山会社に技師として入社した。これが氏と同社との結び付きの始まりである。

1934年同社の政府監理官となり、重役会のメンバーになるまでの2年間この地位にとどまった。この位置で氏は、技術方面の仕事に携わった。1938年政治上の理由で同社を去った氏は、第2次大戦が終ると、同社とその関係会社の管理者に任命された。

一方氏は1949年には、鉱山大学の名誉博士に列せられた。このことは学識と研究における氏の卓越した立場を示しているといえよう。

1959年に、氏はオーストリア・アルピネ鉱山会社およびその姉妹会社の社長となつた。

この他氏は、1951年には英国鉄鋼協会の副会長に任命され、'55年にはオーストリア大統領から高級勲章を授与され、その栄誉をたたえられた。

さらに'60年には、フランス大統領からレジオン・ドヌール勲章を贈られた。もう1つ学問的に特筆すべきことは、'62年にウィーン商業大学の名誉員に推挙されたことである。

64年の終りに、オーストリア・アルピネ鉱山会社の社長を退いた氏は、取締役会の副会長となつた。

現在、氏はオーストリア鉄鋼協会の会長と、鉱山・製鉄業連盟の会長の重責を果している。

(Oberegger氏は病気のため来日されませんでしたので、名誉会員推挙状ならびに名誉会員章は駐日オーストリア大使館 Klaus Ziegler氏が代つてうけられました)



Prof. Dr. P. Coheur (Belgium)

ベルギー国立中央金属研究所所長

Coheur博士は、1913年にベルギーのヘルスタルに生れた。'37年リエージュ大学の土木工学と冶金工学課程を卒業した氏は、同大学の助教授を勤めた後、'43~'45年には、アメリカ、ピッツバーグの科学技術研究所で研究を行なった。'47年以後リエージュ大学に戻った氏は、同大学で放射分光学および物理冶金学に関する講座を受持った。この間、1946年に、氏はベルギー物理冶金研究所を設立し、その所長となった。その後同研究所は国立中央金属研究所 (CNRM) として、ベルギー、オランダ、ルクセンブルグ3国の共同研究所に拡大され'60年には氏が同所の所長となり現在に至っている。また Coheur博士は、政府の科学行政委員会の委員、炭鉄共同体 (E.C. S.C.) 技術研究委員会の委員であり、また 1958年にはアメリカの A.S.M. および A.I.M.E. の終身会員に推され、さらに'62年には、英国鉄鋼協会の名誉副会長に選ばれ、同時にラテンアメリカ鉄鋼協会 (ILAFA) の名誉会員となった。



Dr. P. van der Rest (Belgium)

ベルギー鉄鋼連盟会長

van der Rest 博士は 1910 年ブラッセルに生れた。Louvain 大学の法学博士、経済・社会科学修士'32~'34年までの間 Louvain 大学経済研究所助手を勤め、その後アントワープ商業会議所事務局長を経て、'41年にはベルギー鉄鋼業連盟の経済顧問となった。'46年には、ベルギー鉄鋼連盟専務理事となり、'52年同連盟会長となつて現在に至っている。同時に氏は、現在、ベルギー工業連盟の副会長、ベルギー科学行政委員会委員長、ベルギー王立政治経済協会会長・英国鉄鋼協会名誉副会長を務めている。なお氏は'61~'63年まで、OECD 鉄鋼委員会委員長を務めた。

このような経歴を有する氏は、また数々の勲章および賞牌等を受賞している。K. O. Leopold (ベルギー)、C. O. of Vasa (スウェーデン)、George Ist (ギリシャ) などがそれである。



Mr. Jacques Ferry (France)

フランス鉄鋼連盟会長

Jacques Ferry 氏は USINOR 社社長ルネ・ダミアン氏の後任として 1964 年 1 月 1 日、フランス鉄鋼連盟会長に就任、現在にいたっている。

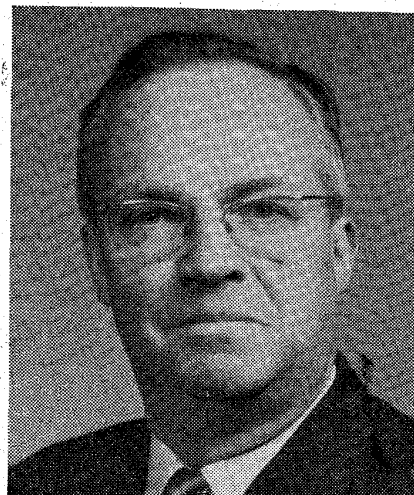
政治科学自由大学において法律博士の称号を授与された氏は、1935 年官吏として社会生活の第一歩を踏み出した。最初商務省に入り、のち国家経済省に移った。戦後氏はフランス鉄鋼連盟に入った。連盟における氏の活動は目覚ましく、順調に、総務課長、経済局長、事務総長、常務理事と昇進し、1958 年 11 月以来副会長の重責を果していた。これらの職責を全うしながら氏が取り組んだ問題の中で、特記すべきは次の事例である——

○ヨーロッパ炭鉄共同体条約の設定。

○1947 年以來継続されている第 1 期～第 4 期設備近代化計画の企画と実施。

一方フェリー氏は、1952 年以來鉄鋼融資団 (GIS) 会長の職にある。GIS とは、フランス鉄鋼業の投融資を容易ならしめる目的をもつ機関で、特にフェリー氏が会長就任以來、金融市場で公募し始めた“鉄鋼債”によりフランス国内に広く知られている機関である。

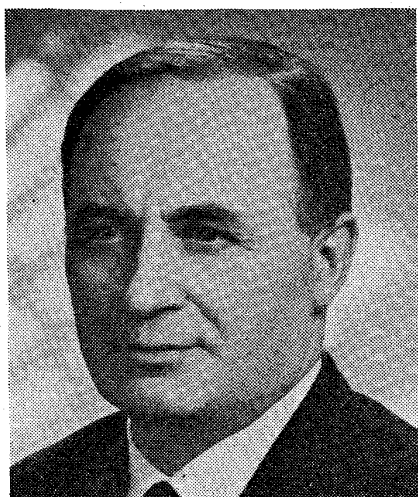
フェリー氏はまた、ヨーロッパ炭鉄共同体諮問委員会の委員、およびフランス経営者連盟理事会の理事を兼ねている。氏は、レジオン・ドヌール勲章第 4 等級章および従軍十字勲章の受章者である。



Prof. Dr. Paul Lacombe (France)

フランス金属学会会長

ポール・ラコンブ博士は、リール (Lille) 大学卒業後、ショードロン教授研究室に入り、軽合金の構造的硬化、金属組織学等々に関する研究を約 20 年間続けた。'40 年すでに科学アカデミー賞を受賞した博士は、'43 年には理学博士号を受けた。さらに博士は、'45 年には、国家産業奨励協会金賞を、'50 年には同オスモンド賞を受賞した。'52 年にパリ国立高等鉱山専門学校の正教授となつた博士は、同時に同校付属の冶金研究所の所長となつた。同研究所がその経費の多くを IRSID、および原子力委員会の財政援助に仰いでいる関係上、氏は鉄と合金に関する研究を続ける一方、核金属の研究分野においても目覚ましい活動を続けている。'60 年には、パリ大学理学部の一般冶金学教授となり、翌年にはフランス金属学会から、サント・クレル・ドビル賞を受賞した。さらに翌'63 年には、ドイツ金属学会から“HEYN”賞を受賞し、'64 年にフランス金属学会会長となり、現在に至っている。



Mr. Henri Malcor (France)

欧州鉄鋼情報センター会長

1927年パリ鉱山学校に入学した氏は、その後 1931 年には Compagnie des Acieries de la Marine et d'Homecourt に入社した。それ以来 6 年間 Homecourt で溶鉱炉の技術と転炉の基礎技術を学び、さらに平炉、電気炉の技術を習得した。1937年には、同社パリ事務所の主任技師となり、'52年には同社の部長となり、'60年社長となった。この間 1943年には、フランス鉄鋼連盟の要請により鉄鋼中央研究所 [IRSID] 設立の立案に当り、戦後この研究所の設立のために、フランス鉄鋼協会から招聘され所長となり、1959年まで同職にあつた。また、1944年に氏は、ベルギー、ルクセンブルグ、イタリー、ザールランド、フランスが参加している、De Documentation Siderurgique を設立するという目覚ましい功績を果し、その会長となつた一方、ベルギーの Ougrée にある Low Shaft Furnace Committee の理事をも同会設立以来務めている。Malcor 氏はこの他に、英国鉄鋼協会の名誉会員であり、デュッセルドルフの Verein Eisenhüttenleute の名誉会員でもある。さらに1964年、英国鉄鋼協会よりベッセマー金メダルを授与されたことも特筆すべきことである。



Dr. Marc Allard (France)

IRSID 鉄鋼中央研究所所長

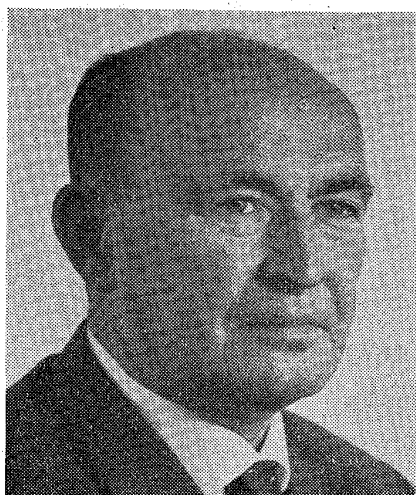
現在、IRSID 鉄鋼中央研究所長である氏は、製鋼関係の研究で名声を博している。

氏と IRSID との関係は古く、1951年 USINOR 会社の部長のまま IRSID に出向し、1953年には総支配人となり、現在では所長として活躍している。それと同時に、1961年から 1965年までフランス国立技術研究協会の会長としても大いに活動した。

氏の研究については前述したごとく製鋼関係が有名であるが、大戦前に Mr. René Perrin と共同で、溶融スラグと混合することによつて鋼の製錬を行なう“Ugine-Perrin 法”という塩基性ベッセマー製鋼の利用開発を行なつた。

また、氏は多くの公式会議のメンバーで、特に“The Steel Commission of the French Plan”では、その会の重要メンバーとして活躍している。なお氏はレージュンドヌール勲章の受章者である。

(Allard 氏は病気のため来日されませんでしたので、名誉会員推挙状ならびに名誉会員章は Paul Lacombe 氏が代わつて受けられました)

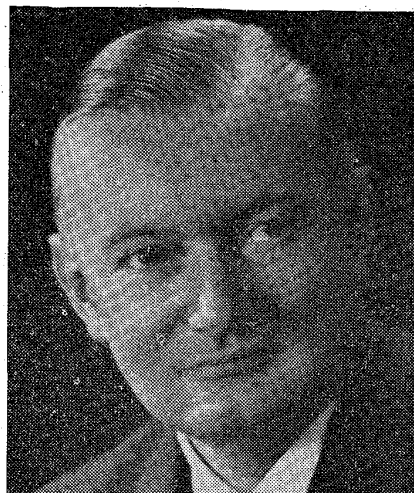


Prof. Dr. Willy Oelsen (Germany)

マックス・プランク鉄鋼研究所所長

Willy Oelsen 博士は 1959 年に就任以来、Max-Planck 鉄鋼研究所所長の職にある。

1905 年 Ostheim に生れた博士は Kaiser Wilhelm 第 2 高等実科学校を卒業後、Göttingen 大学工科で物理化学、数学、物理学、鉱物学、金属学などを修得し、1929年同大学より Doctor des Philosophie の学位を得た。1931 年 Kaiser Wilhelm 鉄鋼研究所の所長である Friedrich Körber 教授の助手となり、物理化学研究室に勤め、その後化学と金属部門の最高責任者に任命された。また 1938 年 Westfalen の Münster 大学の金属化学部門の講師となり、1944年教授となつた。大戦中は Clausthal 鉱山専門学校で教鞭をとり、戦後同校の鉄冶金学と鑄造の講座を受持ち、1958年から1959年の間に同校の校長をつとめた。この間の主要研究としては、二元系あるいは多元系合金の熱力学分析と熱量計に関する研究があげられる。1949年に Max-Planck 鉄鋼研究所の所外学術員に任命され、その後同研究所の所長となつた。また 1959年には Clausthal 鉱山専門学校の名誉教授、1960年には Köln 大学の名誉教授、さらに 1963年には Sachsen にあるドイツ最古の Freiberg 鉱山学校の名誉工学博士の称号が博士に贈られた。

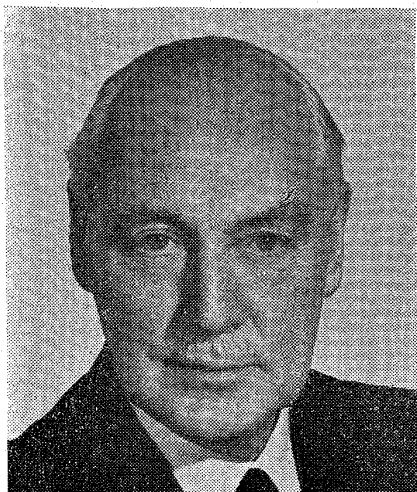


Mr. Ernst Wolf Mommsen (Germany)

ドイツ生産性本部長

フェニックス、ラインロール AG 専務取締役

氏は 1939 年にベルリンの法律学校を卒業して、German Reich Industrial Association に管理職として勤務したが、1940 年に Reich Ministry of Armament and War Production に転じ後、その中央部の部長になつた。その後 1946 年に電気工業に従事し、1948 年にはドイツ鉄鋼連盟の Board of Management に入り欧州鉄鋼共同市場の設立に活躍した。この時の手腕を認められて 1953 年に Klöckner 針金工場の支配人となり、ついで Werke AG の取締役役に抜擢された。次いで Rheinische Röhrenwerke AG の取締役役を経て合併拡大された Phoenix-Rheinrohr AG の専務取締役となり現在にいたっているが、これらの経歴に加えてドイツの各種会社の社長や会長を兼ねていることで、彼がいかに有能な実業家であるかが伺われる。また、現在ドイツ生産性本部長や、各種工業会関係の会長、副会長または役員を務めるかたわら、Advisory Board for Foreign Trade, The Board of the German Social Economic Society のメンバーであり、OECD 南米グループの主査をも務めている。



Sir Andrew McCance (Great Britain)

元英国鉄鋼協会会長
 コルヴィル製鉄名誉会長

1910年ロンドンの王立鉱山大学を卒業した氏は'16年にはロンドン大学の Doctor of Science となった。William Beardmore 会社に入社し、1919年にはコルヴィル会社に冶金顧問技師として入社した。同年氏は The Clyde Alloy Steel Co. を創設し、最近引退するまで社長の職にあつた。'31年に氏は、コルヴィル会社の取締役、'44年副会長兼常務取締役になり、'56年には同社の会長兼常務取締役になった。

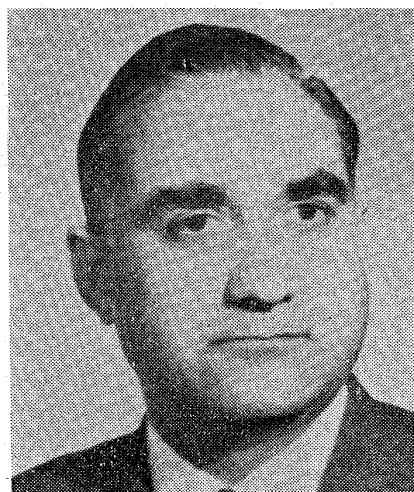
一方、氏は'40年にはベッセマー金メダルを受賞し、'47年にはナイトの爵位を受け、また'51年には、ランカシャーの副知事に任命されている。

現在コルヴィル製鉄名誉会長である氏と、英国鉄鋼協会との関係は、1914年に氏が鉄鋼協会会員に選ばれた時に始まる。'48~'50年までの間、氏は同協会の会長の職にあつた。そして'62年には同協会の名誉会員に選ばれた。

その他氏は、英国鉄鋼連盟会長、英国鉄鋼研究協会会長、英国ガス工業協会会長などの職を歴任している。

氏はこの他にも諸々の役職を経ている。また、科学技術誌に数多くの研究論文を寄稿している。

1962年には氏は、コルヴィル会社の会長職を引退し、同時に名誉会長に推挙された。



Dr. B. R. Nijhawan (India)

インド国立冶金研究所所長

Nijhawan 博士は 1915 年に出生、'36年に Banaras Hinda University を卒業した。その後英国 Sheffield University に留学して冶金学を修め Ph. D の学位を得た。

氏は多くのすぐれた名誉や褒賞を授与されているが、その中でも“Padma Shree”賞は、1958年の国家記念日にインド大統領から授与されたものである。また氏はインド政府の信任が厚く、Hindustan Steel Ltd., 国立インド技術研究開発会社、国立インド鉱物開発会社、Guyarat 鉱物開発会社の重役として、インド政府から任命されている。その他にも最近3年間、インド鑄物協会の会長でありインド金属学会や他のいろいろな技術団体に関係している。海外の団体にも認められて、1958年に英国鉄鋼協会の名誉副会長に任ぜられている。

氏が来日したのは、これが二度目である。1959年にインド政府派遣鉄鋼技術視察団の一員として中国と日本を訪問して以来の親日家で、再度の来日を喜ばれている。

現在氏は、多くの海外視察を行なった広い視野をもつて、インドを前進させる動力源となり、その開発に努力している。



Prof. Dr. Antonio Scortecchi (Italy)
FINSIDER 鉄鋼研究所所長

Scortecchi 博士は 1896 年に生れ 1919 年に Firenze University の Doctor of Chemistry となった。

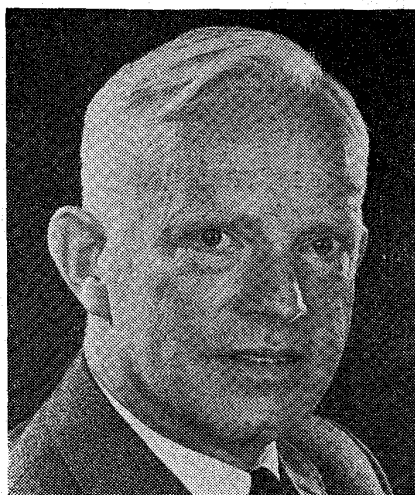
鉄鋼業の研究部門からスタートとした氏は、ミラノ E. Breda 科学技術研究所の物理化学関係の主任となりその後、Ansaldo の研究所所長、ついで工場長、Ilssa-Viola の工場長、Ilva の取締役、イタリア冶金協会設立委員および副会長、ヨーロッパ経済開発機構の研究委員会副委員長、Assider 研究委員会委員長、などさまざまな経歴を持つているが、1961年にはイタリア金属学会会長となり、また '50年にはフランス金属学会の名誉会員に選ばれた。そして 1965 年現在 FINSIDER 鉄鋼研究所の所長である。また、鉍石還元の実験装置、および鉄カルボニルとして鉍石から得る装置など、注目すべき研究がある。1962年に会社関係を辞して、鉄鋼関係の講義を受け持つ教授として活躍している。



Mr. Carlos Prieto (Latin America)
ラテン・アメリカ鉄鋼協会会長

氏は、1898年に生れ、法律を学んで弁護士の資格を得た。1923年にラテン・アメリカで最も古い鉄鋼会社である Cia Fundidora de Fierroy Acero de Monterrey. S. A. に法律担当最高責任者として入社した。以来、氏は実業家としての手腕を遺憾なく発揮して、次々と指導を行ない、近代化と拡大化が実現された。それにより、Fundidora de Monterrey の鋼生産量は 1964 年には 50 万 t となり、1967年までには 100万 t に達するものと予想されている。1959年にはラテン・アメリカの主要鉄鋼会社が加盟しているチリーのサンチャゴにあるラテン・アメリカ鉄鋼協会 (I.L.A.F.A.) の結成業務に従事したが、1961年以来同会の会長を勤めている。また氏は 1939 年以来 Banco de Mexico (国家の貨幣発行と準備金を掌る銀行) の理事会のメンバーとして正式に政府から任命されている。その他 ILO 総会やいろいろの会議の代表としても政府から任命されている。国際的にも活動が認められ A.I.S.I., B.I.S.I., S.F.M., の名誉会員として指命されている。

氏は、銀行、保険会社、セメント会社、ゴム会社、合成樹脂会社、繊維会社などの重役である一方、文化後援会のメンバーでもあり、実業や市民活動の他に、音楽を愛好したり、伝記科学に興味を持つている。メキシコ湾に面した Tecolutla にある氏の農場には、貝殻博物館や熱帯植物園があり実業面に劣らぬ芸表家でもある。

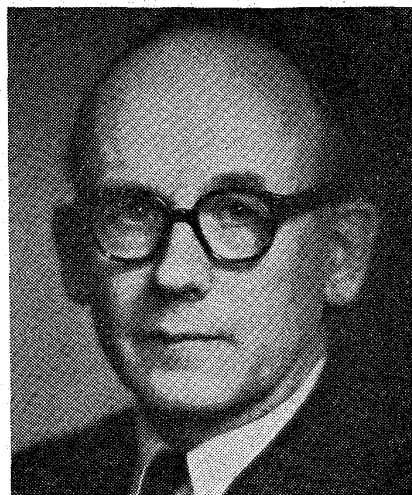


Mr. Alexander Drijver (The Netherlands)

ローヤルオランダ製鉄会社，専務取締役

1904年 Bodegraven に生れた氏は Delft の工業大学で機械工学修士を得たが，その実践の第一歩はオランダ海軍の潜水艦の技術部門における兵役だった。退役後 1928年ローヤルオランダ製鉄会社 (Hoogovens) に入社し，技術部門主任を経て 1950年に同社取締役に就任した。現在では同社の専務取締役に最高責任者でもある。Hoogovens 社が現在の状態になったのは氏の実行によるといっても過言ではない。特に同社のイムイデン製鉄所の拡張は氏の全責任によつて完遂されたので今日の隆盛は氏あつてのものである。

氏は Hoogovens, その姉妹会社および関連会社の一般管理業務のかたわら，研究，発展，工学に関する最高の指導方法を研究している。また，国内，国外の工業に関する協会，委員会の仕事もち，1960年にベルギーの国立中央冶金研究所副所長に任命され，さらに 1964年には英国鉄鋼協会の技術委員会の委員に選ばれるなど，非常に多忙な日々である。

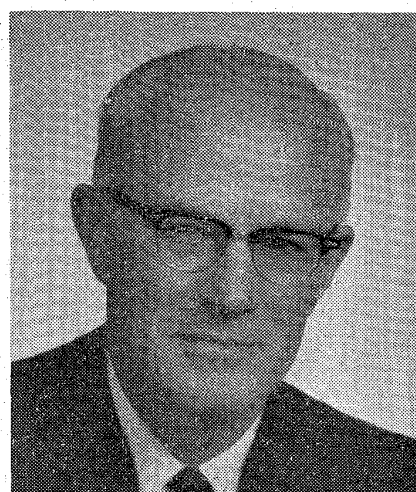
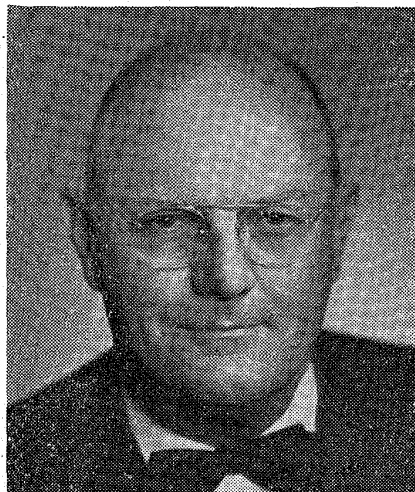


Mr. Hakan Vilhelm Abenius (Sweden)

スウェーデン鉄鋼連盟会長

1920年 Örebro 専門学校を卒業した氏はその後ただちに国立技術研究所で鉱山学研究に励み，'27年 Boliden 鉱山会社に勤務した。'35年には同社の主任技師となった。'39年 Stora Kopparbergs Bergslags AB に入社し，'46年には取締役に，48年には常務取締役にとなった。また氏は，同年以来スウェーデン鉄鋼主脳委員会の委員であり，1962年には，スウェーデン鉄鋼連盟会長となり現在にいたつている。

このほかにも氏は，スウェーデン工業協会の会長，スウェーデン雇用連盟の会員，スウェーデン国立科学技術協会の会員である。



Dr. James B. Austin (U.S.A.) U. S. スチール副社長
Dr. John A. Fellows (U.S.A.) アメリカ金属学会会長
Mr. William B. Stephenson (U.S.A.) A.I.M.E. 次期会長

Dr. J. B. Austin

Austin 博士は、Lehigh 大学化学工学科を 1925 年に卒業し、1928 年には Yale 大学から化学博士の学位を授与され 1962 年には Lehigh 大学から科学に関する名誉博士の学位を授与された。

氏は United State Steel Corp. の研究所が 1928 年に創設されて以来、研究所に勤務するようになり、1958 年同社研究部門の責任者として現在の地位についた。

氏の科学面における業績は、化学と金属熱力学の分野および高温における金属や耐火物の熱膨脹と熱伝導の分野において発揮されている。

また、他方氏には浮世絵や近代創作版画に興味を持たれ、蒐集家といつても過言ではない。

特に氏の書いた「十返舎一九の東海道中膝栗毛絵巻」(Some Little-known Comic Tokaido Prints of Jippensha Ikku) は日本で浮世絵芸術雑誌に掲載されたほどである。

また、氏は学会にも力をそそがれ、ASM の会長の経歴もあり、AIME の理事で活躍され、英国鉄鋼協会の名誉副会長である。

Dr. J. A. Fellows

氏は、ウィリアム大学で物理学を、またマサチューセッツ工科大学で物理学と冶金学とを学んだ後 Babcock & Wilcox Co., American Brake Shore Co. の技術研究員として勤務し、現在高温クリープ試験と取り組んでいる。氏の業績の多くは、鑄造方法、合金鋼の熱処理、耐熱鋼のクリープ試験、耐摩耗性合金の試験や選択などに発揮されて、1944 年には A.S.M. の "Henry Marion

Howe" メダルを受賞している。また、大戦中はエンジニアリングの責任者としてマンハッタン計画に参画し、責務を果たした経歴がある。1953 年以来、氏は冶金開発部門の責任者として、Mallinckrodt 化学工場のウラニウム部門に従事しているが、他方では、A.S.M. と A.I.M.E. の両方でも活動を続けている。かつて A.S.M. のセントルイス大会の議長であり、現在は会長、A.I.M.E. においては予算委員会の議長と実行委員会のメンバーというように、非常に重要なポストについている。

その他に A.S.T.M., アメリカ核学会の会員として活躍し、国際的にはロンドンにある金属学会の会員として大いに認められている。

Mr. W. B. Stephenson

氏は来年 1966 年より AIME の会長に就任することになっている。氏と AIME の関係は古く、1946 年に入会して以来実質的な活動メンバーの一員であり、選鉱部門の指導的立場を守りつづけている。また AIME に関係すると共に、1938 年 The Allen-Sherman-Hoff Pump Co. 勤務、1956 年水力協会会長、1956 年 The Allen-Sherman-Hoff Co. 社長という経歴が示すようにポンプに関する権威者でもある。また氏は、アメリカ鉱業冶金学会とカナダ鉱業冶金協会の会員でもある。

1961 年、AIME 主催塊成法 (agglomeration) に関する第一回国際シンポジウム 総会の議長をつとめ、翌年 AIME 傘下の鉱業部会長に就任し、1963 年 AIME 副会長をつとめ現在にいたっている。AIME の 40,000 名近い会員に期待されて、来年会長に就任することは真に当を得ているといえよう。

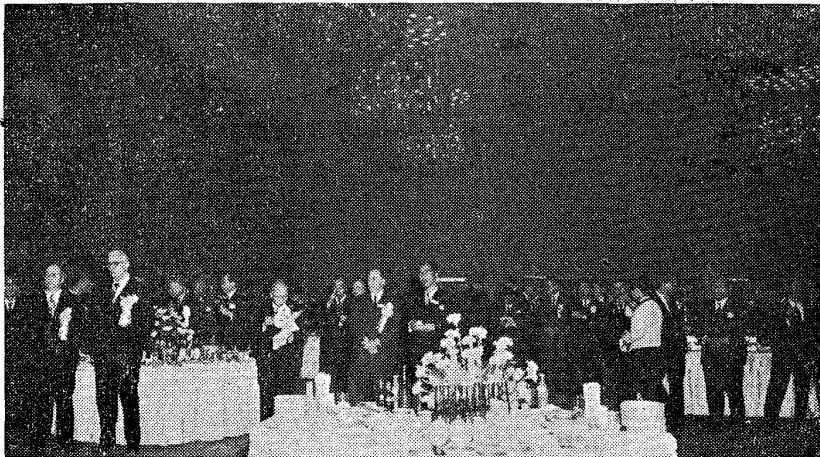
1.5 記念祝賀会

4月6日(火)午後 6:00 ホテル・ニューオータニ

多少堅苦しい感もあつた創立 50 周年式典とかわり、和らいだ雰囲気のうちホテル・ニューオータニ芙蓉の間でカクテルパーティー形式の祝賀会が開かれた。

フロアーと壁を扇の模様で飾られた会場の高い天井には、シャンデリアが美しく輝き、中央テーブルに置かれた氷像が爽やかさを呼んだ。

恒例の懇親会をかねたこの祝賀会には多数の会員諸氏が出席され、ホールの各所で会員同志の歓談に花が咲いた。加えて今回は、Prof. Dr. H. Schenck, Prof. Dr. J. Chipman はじめ 50 余名の外人客を迎え国際色豊かなものとなつた。



祝賀会場ホテルニューオータニ

次途中八幡鉄(株)小島会長の音頭で乾杯が行なわれた。次いで五弓東大教授の司会のもとに湯川本会会長の挨拶が述べられた。“本会が創立 50 周年という輝かしい今日を迎えることができたのはひとえに会員諸氏のご協力の賜物であり、これに対し深く感謝するとともに、海外鉄鋼界から多くの賓客を迎えたことを契機として、今後本会の一層の充実と国際的發展をはかりたい。”という会長の挨拶に出席者一同は拍手をもつてこれに対する同意と協力の意を表した。続いて三島前会長、長老金子恭輔博士、Schenck ドイツ鉄鋼協会会長らのお祝のスピーチが行なわれた。

その後、ホール正面のステージでは日本舞踊、琴合奏など各種催し物が繰りひろげられ、場内は次第に緊張も解かれて、和やかな雰囲気が漲つた。ホール内には、各テーブルに盛られた料理のほかにも寿司、天ぷらなどの模擬店がならび出席者の人気をよんだ。婦人ぬきのこのパーティーでは、時には豪快な笑い声が随所に起こり、また一隅では会員同志専門的な話にも熱が入つた。

慣れぬ手つきで箸をあやつる外人の姿も、いつもの懇親会には見かけぬもの珍しい風景であつた。

出席者 500 余名を迎えたこのパーティーは、名残りの尽きぬうちに午後 7 時 30 分散会した。

1.6 晩 餐 会

4月6日(火)午後 8:00 帝国ホテル

桜の花もちらほらほころび始めた春の宵、記念祝賀会場から場所を帝国ホテル・孔雀の間に移して祝賀ディナーパーティーが催された。

祝賀会場のホテル・ニューオータニ芙蓉の間の近代的な装飾と対称的に、孔雀の間は濃褐色のレンガや柱と白壁との対比の鮮やかな古典的な雰囲気に色どられた。

中央の色彩鮮やかな吹上げ天井は豪華な感じを与え、またホール正面には参加各国の国旗が立ち並び、国際色を加えた。真白なテーブルクロスに覆われたテーブルにはそれぞれ褐色の木製椅子が配

され、壁や柱と同様に白黒の鮮やかな対比が目を楽しませる落ち着いた装飾であつた。

創立 50 周年記念式典日の最後を飾るこのパーティーには、愛知科学技術庁長官(文部大臣)夫妻、赤坂日本鋼管社長夫妻はじめ、Dr. H. Dittman 駐日ドイツ大使夫妻ら各国駐日大使夫妻と内外の多数名士とともに、来日外人客夫妻 47 名を迎えた。

午後 8 時前から来客各位は夫人同伴で孔雀の間控え室に参集され、定刻を少々過ぎてからテーブルに着いた。

パーティーは湯川本会会長の挨拶によって始まり、田



Drijver 氏と歓談する愛知長官



晩 餐 会 風 景

畑本会専務理事が司会をつとめた。列席者は、22 のテーブルにわかれ、各テーブルは邦人外人各4名という少人数のうちに和やかな歓談が繰り広げられた。ホール正面上のボックスに控えた演奏者の奏する室内楽のメロデーが一層会場の雰囲気をやわらげた。

途中、愛知科学技術庁長官（文部大臣）から本会に対する次のような賛辞と期待が述べられた。“国家経済における鉄鋼の重要な位置を考えると、その発展を支える科学技術の進歩を忘れることができない。と同時にこれに対する貴会の功績を賛えるものである。また海外学・協会との交流などにおける貴会の有益な活動は、今後の鉄鋼技術の進歩ならびに業界の発展にとって欠くことのできないものであり、世界各国の鉄鋼界の代表を迎えたこの席で、改めて本会の活躍を期待する”。

また来日外人客を代表して、元英国鉄鋼協会会長

Andrew McCance 卿から今や国際的に最高水準に達した日本の鉄鋼業の一層の発展向上に対する本会の責務の重大さ、ならびそれに伴う本会への期待と今日の隆盛を賛える次のような挨拶があつた。

“各国鉄鋼技術が進歩発達し、同じような水準に達した今日、各国が技術的に相携えて進まなければならないであろう。特に昨年 **Kindred Society** となつた英国鉄鋼協会と日本鉄鋼協会とは、今後より一層協力を続けてゆきたい。また貴会の創立 50 周年というお祝の席を通じて、日本はもとより各国鉄鋼界の主脳陣との交歓の機会を得たことは大きな喜びである”。

最後に、住友金属工業株式会社社長広田寿一氏の音頭により、本会の発展と各国鉄鋼界との交歓を祝つて乾杯が行なわれ、祝賀晩餐会は盛会裡に幕を閉じた。